
虎の生き様っ！！

勇真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虎の生き様っ！！

【Nコード】

N3635K

【作者名】

勇真

【あらすじ】

山で頭を打ったら異世界に来てしまった何故！？現実で魔物と呼ばれるおぞましいものまでいるっ！！とりあえず頑張るしかない！！

無口すぎて記憶喪失と勘違いされた橘 虎侍が元の世界に戻るためにがんばるお話です。

この度長期更新停止から復活します。つきましては小説の内容を一度見直しをさせていただきます。

今回の更新は見直しのためにアンケートをとります。
めんどくさいと思いますがご協力お願いします。

第一話（前書き）

主人公が言葉を口に出さないので主人公の思考と語り手の区別がつきにくいですが末永くお付き合いください

第一話

こ…ここはどこだー！ー！！

今の俺の心の雄叫びの原因は数時間前にさかのぼる。

周りは木々が立ち並び新緑の心地いい緑が広がっている。
ザッザッザッザッザッザッザッ

「……………」

山道を無言で登る14〜15歳の少年が一人、道着を着て腰には刀を携えている。

やっとゴールデンウィークが来たな〜
高校に入ると勉強が難しくて気が張って駄目だな散歩してるとよくわかるし

中学からの友達が居てよかった。無口すぎて俺じゃ卒業しても友達
が居ないままになって、同窓会とかでこいつ誰だっけ？って、思わ
れてあの頃はよかったな〜とか言われて、終わり頃によやく苗字
だけやっと思い出しておしまいになるところだった。自分で思って
悲しいな…

ザッザッザッザッザッザッザッ

「…着いた…」

目的の場所に着いた少年は橘 虎侍^{たちはなごらし} 今年で高校1年になって最初
ゴールデンウィークを堪能しているところだった。クラスに一人は
いるものすごく話し辛い無口な少年だ。

今は祖父の家から30分ほど山を登ったところにある木々が途切れ
ている場所だ。

天気がいい日はここで祖父から教えてもらっている剣術を練習をす
るのが日課で、昼食を食べてから直ぐに山に向かい夕暮れまで練習
することもあれば、転がっている岩に腰掛けてのんびりしている。
なんとも爺臭いものだが虎侍にはこの一時が一日の中で一番楽しい
時間なのだ。

最近じいちゃん腰痛がひどくなってあんまり相手してくれないから
体が鈍ってるな。今日は少し実践的にしようかな。

「…よし…」

ザッ

ズルッ ドテッ ゴツッ！

「ツツツツツ！」

一歩出た瞬間転がっていた石に滑り尻餅をつきほんの少し突き出し
ていた石に頭を強く打ち付けてしまった。あまりの激痛に頭を抱き
かかえ地面でゴロゴロ転がっていた。

痛い痛い痛い痛い！！！！！！

なんで頭の方にまで石があるんだよ！！

お星様が見えたよ！！キラッて！キラッて！！頭陥没したよ絶対！！
「うっ……」

虎侍はのっそりと起き上がりたんこぶができたところを触って顔をしかめた。

「……帰ろ……」

虎侍は来た道を足元を気にしながらゆっくり降りて行った。

第一話（後書き）

はじめまして！いままで小説なんて書いたこと無いので誤字、脱字や文章が変になるところが多いと思います。あと、知らずのうちに方便などが出てくると思います。あまりにも判りにくいときは報告よろしくお願いします。

第二話

ザッザッザッザッ

山を降り始めて40分いつもなら祖父の家に着いているぐらい。
だが、見えてきた景色は広大な田畑と、その真ん中にあるそこそこ
大きい町。

その町の家は今では数少ない藁葺き屋根の家とそこに埋もれるよう
に2、3件ほど瓦屋根の大きな家。

虎侍が知っている景色とは全く違うものだった。まるで

「……………」

……………あれ？

俺こんなところ知らないよ！！？えっ？あれ？あの場所から一本道
だよ？俺そんなに方向音痴だっけ？

こ…ここはどこだ————！！！！！！

虎侍の心の雄叫びは心の中でしか響かない。

とりあえず降りて町の人にここがどこだか聞いてみよう

ザッザッザッザッザッザッザッザッ

*

*

*

しばらく歩いて町の門のようなものが見えてきた。遠くから見えていた町を一周していた塀ちょうど虎侍が歩いていた道を真っ直ぐ行ったところに大きな昔風の門がある。

門番の人は扉の両方に一人ずつ日本式の鎧、頭のほうは兜ではなく笠を被り、長い槍を持っていた。

映画の撮影場所かな？カメラとか無いのに立っているの可哀想じゃね？ってか俺ちようどいい格好してるしキャストとして入れるな。ちよつとだけ中見たいし。有名ないたらラッキーだし。

目的が変わってしまったっている虎侍だった。

そして扉を潜るときにチラ見をされたが何も言われずあっけなく侵入に成功した。潜った瞬間から活気溢れる声や音で埋め尽くされていた。虎侍は呆気にとられ少し立ち尽くしてしまった。

すげー！役者つてすげー！こんなに役になりきるなんてすげー！つてかすげーしか出てこねえ！！
カメラどこだ？

虎侍はキョロキョロしながら町を散策し始めた。

あの野菜売ってるおばちゃん板についてるな。まるでいつもあやつてるみたいだ。周りの人の服も生活観が感じられるな。しつかり着込んでる感じがする。これどうやって用意してるんだろ？服は大体江戸時代とかそのくらいかな？金髪の人とか居るけどどういう設定なんだろ？ん。

「……………」

声と表情は全く動いていない。だが虎侍の思考は深まるばかりだった。

あつ！場所聞かないとな。スタッフの人どこだろ？あつちかな？

虎侍は本来の目的を思い出し大通りから外れた。住宅地のような場所に入っても相変わらぬ活気で大人から子供まで生きいきしている。子供は追いかけてっこをしていたり大人は買出しの物を持って家に入っていたり帰宅をしているのか散歩をしているのかわからないが様々に人が行き来している。

へえー大工職人まで居るのか凝ってるなーあんな高いところに居てよく作業できるな。あつちは屋根の藁を換えているのか？瓦を使っているところは偉い人用とか？んー難しいな昔は。

「おいっつー！！兄ちゃん危ねえー！！！！！！！！」

え？？？？誰が危ないの？？？？

ガッシャンツッ！！！！！！！！

「のふっー！！！！」

2回目かよ！！！！何か降ってきたー！！！！
つてかやべ目の前が暗くなってきた…………無理…………

第二話（後書き）

ども、建物とかの文章表現が分からなくてあたふたしてます。
話が纏まらなくて結構色々脱線してます。

とりあえず、長いお付き合いになるとだけ言っておきます。
それではバイトに行ってきます〜

第三話

「……っ！ーお……っ！……ちゃん！ーおい！ー！」

うるせー……頭いてー……何が当たったんだ？ すごい派手な音立ててたけど……

「おいっ！ー兄ちゃん大丈夫か！ーおいっ！ー！！！」

ペシペシと虎侍は頬を叩かれてようやく目を開けた。五十歳後半のゴツツイ顔の爺さんと三十歳前半のおっさんが虎侍の視界の約8割を占めていた。寝起きには苦しい光景だ。虎侍がぼろっと眺めていると爺さんの方が目を輝かして、

「おお、目え覚ましたか！ーよかった！

先生っ！ー坊主が起きた！ー早く診てくれ！ー！」

喧しい……ん？ 先生？ 病院？ 家の近くの病院か？ 早く家に帰りたい……

虎侍が軽いホームシックにかかっているときにバタバタと足音がして四十歳半ばぐらいの先生らしき人が来た。白衣などは着ていない。

「あゝ大丈夫ですか？名前言えますか？」

「…橘…虎侍…」

先生はフムフムと頷いて、片手を出し指で三を作って

「何本に見えますか？」

「3…」

さらに先生はフムフムと頷き、おっさんと爺さんに「大丈夫ですね」と言っている。虎侍は待ちきれずに質問した。

「どこどこですか？…」

「サハサラ地方のアカヤクですよ」

「……………」

んゝ空耳？サハサラ？サハラ砂漠？砂漠？んゝあかやく？…………あれ？アフリカまで出てるし…
でも、日本語喋ってるよ…

「……知らない……」

「『記憶喪失か（ですね）……』」

記憶喪失！?!?!? Memory loss? What

is it?

イヤイヤイヤ。ちょっと落ち着こう、どこでどうして記憶が喪失したということが出た?

Final answer? 分かりませんマル

落ち着けてない。

「えっと、サハサラ地方のアカヤクって礎永鉄の加工発祥の地で有名ですよ。あつ、礎永鉄って分かります？」

「いえ…」

「じゃあ旋術は？」

「知らないです…」

先生は困りましたねえと少し唸っている。後ろの爺さんとおっさんも唸っている。

記憶喪失じゃあないんだけれど…どうしよう。ってか旋術ってなんだろう？

「旋術って？…」

「ええっと、簡単に言いますと肉体強化ですね。体の中にある『旋』と言う力を体に巡らしそれを扱うことを旋術と言います。一般人は

旋術を使い、腕力や脚力を高め生活に役立てていますね。
武人の方は旋術をより巧み扱い鎧の代用をすることをしていると聞いています」

ふあんたじー…俺どうしたんだろ？どこでこんなファンタジーなところに来たんだ？夢？ああ、夢だこれは、うん。Dreamだ。慌てて損した。

「多分、知識のところだけスポンと抜けたんでしょう。一時的なものでしたら直ぐに直りますよ」

「先生スポンって釘じゃないんだからよお」

「そうそう、直るって家具みたいに簡単に直るもんじゃなからう。坊主も困惑しとるぞ」

「棟梁、さつきから殆ど表情が動いてませんよ」

「じゃかあしい！！元はと言えばおめえが瓦を落とすからこんなことになったんだぞ！！」

かつ…瓦どおりで痛いわけだ。聞いたら余計に痛くなってきた。

「だって棟梁、俺まだ一回しか瓦葺きやったことないですよ！いきなりやれって言われてもできないですよ！！」

んゝ転けたときのと瓦のときのがいい感じにマッチして痛い。結構鈍痛…

「そんなこと言ってるからお前はまだ半人前なんだ！！いいか、職人の世界では弟子は師匠と兄弟子の技術を見て盗むのがあたりめえーなんだよ！！！」

……夢では痛みって無いって聞いたような……

「見てたら働けて尻を蹴り飛ばすくせに！！」

鈍痛だよ。声の響きか痛みに変わるぐらいに。

「おめえその口の利き方はなんだ！！！！破門だこの野郎！！」

「ちょ、ちょっと待ちましょうよ。とりあえず怪我人が居るんですからケンカなら外でやってください」

「む、すまん」

「すみません」

2人はドタドタと外に出て行った。先生はふーっとため息を吐いていた。

「とりあえず今日はここで泊まっていてください。食事は後で持ってきますね」

先生はまたバタバタとどこかへ行った。だが虎侍はそんなことを気にしている暇は無かった。今、虎侍は思考の中で盛大に焦っている。さっきの慌てていたのとは全く違うものだ。

夢じゃない！！あゝあゝ今俺の考えていることが分かるかい？？旋術という能力っぽいもの＋聞いたこと無い地名「パラレルワールド」もしくは異世界でも可

……………どうやって帰るのこれ！??

目が覚めたらはない。さっき覚めた。もう一回頭を打ってみる。これ以上頭打ったらマジで脳みそが危ない。

「……………どうしよう…」

虎侍の眩きは小さすぎてどこにも響かなかった。

第三話（後書き）

キャラが動いてくれました。でも動きすぎて、暴走気味です。
脇キャラがものすごくでしゃばってくれて、主人公埋もれそう……；
引き続き頑張ります。

第四話（前書き）

ちよつと残酷表現が入るかもしれませんが。
あと、蜘蛛が極端に嫌いな方は気お付けてください。

第四話

三日も経っちゃったよ…戻らねえーし

三日経って分かったことは、ここは異世界ということ。

5、6歳の子供が大きなバケツに水をいっぱいまで入れているものを2つ軽々と担いで、オリンピック級の王者も真つ青な速度で走り去って行ったからだ。

あんなのが元の世界に居たらギネスものだよな。でも、走るのはやめたほうがいいね。水結構こぼしていったし。ってか旋術ってあったら便利だな、体の中にある『旋』だっけ？んん、『氣』しかわからねえ。まあその内出来る様になるかな。できなきや諦めよう。

虎侍は思考を一旦止め、貸してもらっている着物の長着の上に自分が持っていた袴をはき、刀を腰に差した。祖父に着物の着方を教えてもらっていたのでもたつくこともなく外に行く準備ができた。足の方は今はあまり見ることもなくなった草鞋を履いた。

異世界に来て二日目に先生に、閉じこもっているより外に出たほうが記憶を取り戻すのにもいいだろうと言われて、気が向いたのと元の世界に戻るすべを探すために外に出た。

刀などの武器は武人と思われる人と、役人っぽい袴を着た人が様々な武器を持っているので何も咎められる事もなく携帯することができた。

ちなみに、記憶喪失は異世界から来たと言って変な目で見られるよ、りいいので逆に利用している。大工職人の二人には悪いことをして

いるなと少し罪悪感を抱いている虎侍だった。

いい天気だな。今日は門の外の方まで行ってみよ。

「散歩に行つてきます…」

「いつてらっしゃい、今日は暑いから気をつけてくださいね」

虎侍は頷き戸を引いて外に出た。相変わらずの活気に少し気圧されつつその中に埋もれるように足を進めていった。

門を出ると広大に広がる田畑。町の人より良い収穫が出来るように草と害虫となる幼虫を取り除き、新たに種を蒔くために土を耕してせっせと働いていた。子供たちは大人に怒られながら他の子と山の方へ行ったり田んぼのあぜ道を走ったりして遊びまわっている。

手伝ってるんじゃないのか？…この時期は大体5月頃かな。近所の人たちが畑の近くにトラクターもっていつてるの見てたし。平和だな…

のほほんとして平和を噛み締めていた。だが、次の瞬間平和は崩れてしまった。

虎侍が居た場所は門から近く高台の方だった為、遠くの森の木が少しずつ倒れているのも気付いたが伐採しているのだろうと思ひまた、足を進めていった。

少し進んで一番遠いところに居た人達が、旋術を使いもの凄い速さで走ってきた。少しずつ近い人もそれに気付き農具を急いで片付け子供たちに呼びかけていた。そしてようやくその人達が言っている言葉が虎侍の耳に届いた。

「おい！！魔物がでたぞーーーー！！！！逃げろ！！早く！道具なんか置いていけ！！」

「爺さん、婆さん早く逃げろ！！！！ガキも早く行け！！！！」

皆さん急いでるけど何？魔物？よく分からん…そんなに急ぐものなのか？

虎侍がそう思っている間に森の方から木々を倒しながら人々を急かしている原因が現れた。簡単に言えば蜘蛛で現せられるものだった。だが大きさが2メートル〜3メートルの大きさが8匹だ。はつきり言って気持ち悪い。今まで木が邪魔だったせいで本来の速度が出ていなかったのだろう。旋術を使っている人達が約50〜60キロの速さとして蜘蛛が80〜90キロの速さで走ってくる。

気持ち悪いー！！鳥肌！！つか追いつかれるぞ！！おいおいおい！！山の方に行っていた子供か？やべーぞ！！！！

虎侍も門の方に向かいながら見ていたが山の方に行っていた子供たちは逃げ遅れ門からは600メートル程の距離がある子供たちが頑張つて走つても大体あと30秒ほどかかるが蜘蛛は子供にグングン追いつき目測で門から半分のところで子供たちは蜘蛛の餌食になるだろう。

虎侍の後ろからは役人を急かしている怒鳴り声や自身の子供があの中に居るだろう親の悲鳴が響く。中には農具で立ち向かおうとしている人に他の人が間に合わないと言い羽交い絞めにして止めている。そうしているうちに子供の中の一人が石に躓き転げた。そして後ろの子が巻き込まれるように2人が転げ。大人たちがさらに騒ぎ出す。虎侍の刀を目敏く見つけ助けるように言い寄ってくる人まで居る。

ちよ、待てよ！俺旋術すら使えないのにどうしろっ！つんだよ！！！！

そして蜘蛛が倒れている子供の50メートル先まで来る。数人の大人が堪えきれず走り出す。

くそっ！！俺は何の為にじいちゃんに剣術を教えてもらつてたんだよ！！！！

虎侍は駆け出す。蜘蛛はあと10メートルを切っていた。

もっと！もっと早く！！速く！！！！

血とは違う何かが全身を駆け抜けた。

虎侍の想いが高まったとき虎侍の視界が劇的に流れ出し、あれだけ遠かった場所に立っていた。そして迷うことなく刀を抜刀し、蜘蛛の頭を切り飛ばした。蜘蛛の体液が辺りに飛び散る。

残りの7匹が群がってくる中、虎侍は慌てず血振りをし、刀を振って体液を飛ばす。滑らかに体を動かし八双の構えをとる。

集中が最高潮まで上がり、今にも飛び掛つてきそうな蜘蛛に氣を飛ばし牽制しつつ子供たちを自分の間合いにちゃんと入っているかを気配で確認する。

両者の緊張が弾ける。

虎侍が動く瞬間蜘蛛7匹は無数の矢に貫かれていた。

「っ……！！！」

「大丈夫か！！！」

声のした方を振り返ると袴を着た役人が武器を持って駆け寄ってきた。張り詰めていた緊張が一気に解けひざが砕けそうになり慌てて足に力を入れる。

こ………怖かったあああああああ！！！！俺、何早まった事してるんだよ！！！！自分から餌になりに行くところだった！！！！

心の中で叫び平常心を取り戻している虎侍だった。顔は相変わらず殆ど動かず無表情だったが。

あれが魔物……この世界の人間の天敵だな。

第五話

「虎侍君、無事でしたか！？散歩に行っただけ帰ってこないから心配しましたよ」

「すみません…」

「まあまあ、先生そう怒らないでやってくださいよ。見ず知らずの子を助けた英雄なんですから」

「え、英雄って一体何をしたんですか？まさかさっきから話題になってる少年って虎侍君のことなんですか？！！」

先生と町人のおっちゃんが少し温度差の違う状態で話をしていた。方や魔物によってもう助からないかと諦めかけた子供を助けた英雄に直にあって興奮しきっている状態で、方や三日前に瓦で頭を強打し記憶喪失になって旋術も使えない状態で魔物に向かっていった無謀さに顔を青ざめている状態だ。

ちなみに虎侍はというと助けた子供の親や親類から感謝の言葉を腹いっぱい、胸いっぱいまで言われ。

英雄の顔を一目見ようと群がっている町人たちにもみくちゃにされ、顔には少ししか表れていなかったが、気圧される程の活気を中心に自分が居ると思うと心身共にぐったりしていた。

＊

＊

＊

5日後、虎侍は求人板の前に居た。

あの後散々先生に旋術ができない状態で魔物にかかっていくことがどれだけ危ないことを事細かに教えられ、そしてそれが終わると旋術がどの様な時でも使えるかを3日間様々なときに聞かれた。

この間英雄の話は噂になり尾びれ、背びれが付く虎侍は何故かとある有名な武家の嫡男で自分の力で庶民の平和を守ろうと親の反対を押し切り色々な町や村を巡っているというものだった。

その噂を聞き年頃の女性がお付き合いをしたいという内容を顔を真っ赤にして言うだけ行って走り去ってしまい、男性の場合弟子にしてほしいということで朝から晩まで診療所の前で座り込み先生に叱られていた。町人のそんな行動は4日目、つまり昨日から収縮し、虎侍はようやく外に出ることができた。だが、奇異の視線は今も途切れることなくそこそこ疲弊してきている。

……胃がキリキリする……俺が一体何をした……！！まあいいや我慢だ、我慢。

それより求人板って結構色々あるんだな。子守、家事手伝い、畑耕し、公衆厠掃除ってなんだよ求人レベル低！！厠掃除って役人がしろよ……！

俺が見たいのはこれじゃなかった。

魔物退治は……10級〜7級か10級は飛び兎退治、糸吐き土竜の幼虫駆除、虎鼬の子供退治、不思議動物だなこれは。飛び兎って挿絵からして羽の生えた兎か？退治する必要があるのか？女の子が喜びそうぞ。

9級は糸吐き土竜の駆除、角蟬の退治、蜥蜴亀の卵駆除、駆除とか退治ばかりだな糸吐き土竜成長してもあんまり強くないのか1つ級上がったただぞ。

虎侍は求人板にある求人書を1枚ずつ見てどんな魔物かを想像し少し楽しんでた。視線のことは忘れていたので本人にはいいのだろう。町人は虎侍がどのような魔物を倒すのか興味津々のようだ。

6級からは役所の中か。危険だから中で処理してるのか？まあ、怖いから魔物退治行く気ないけど。

元の世界に戻る方法を知るにはもっと大きな町とかに行った方がいいのかな？誰にも相談できないから困ったな。とりあえず先生には記憶を取り戻す為に旅をするって言おうかな。んで、商人とか町を行き来する人のところに雑用として付いていくが一番安全だよな。

虎侍が求人板から離れ帰ろうとしたとき役所から人が出てきた。ぶつかりそうになり慌てて立ち止まる。無意識に謝ろうとしてぶつかりそうになった人の方を見ると目に付いたのが燃え上がりそうな真っ赤な髪の毛とそこら辺にいるチンピラが尻込みしてしまいそうになる程の厳つい顔をした武人と思われる青年だった。青年は虎侍をじいーと観察する様に見てニカツと笑う。厳つい顔から想像もできないような温和な笑顔が飛び出てきておっかな吃驚している虎侍だった。

「あんた武人だろ？俺は志真^{しまらいせい} 雷聖。依頼を請けよと思ったんだが2人以上じゃないとできないって言われたんだ。頼む！！一緒に請けてくれ！！」

ギャップとあまりの勢いに圧され頷いてしまった虎侍は後悔先に立たず雷聖に引つ張られて役所の中に入った。袴を着た役人と何かを言い。5分もしないうちに契約書と思われる紙を持ってきた。チラ

りと見えたところには5級と書いてあった。

ああああ！！！！しまったああああ！！！！なんで領いたんだよ俺！！！！5級なんて無理無理！！！！でかい蜘蛛は倒したけど他は無理だつて！！！！誰か！！！！！！！！代わってくれ！！！！！！

虎侍の心の声も虚しく、雷聖は二カツと笑い頑張ろうなと言ってきた。眩しい笑顔だと虎侍は思っていた。

第五話（後書き）

次は視点が変わります。

第六話

雷聖 side . . .

「ああ、やつと着いた。バマストからアカヤクまではちょっとキツいな。もっと近いところにしておけばよかった。もう夕方だし」

雷聖は久々の宿に心躍らせながら意気揚々と村に入って行った。町に入った瞬間、雷聖を見た人は目を見張った。

金や銀、黒や茶など様々な髪の色をした人が居る中で雷聖の赤い髪は目立っていた。

そして物珍しい髪を持つ武人の顔を面白半分、興味半分で見た人達は後悔した。なにしろ雷聖の顔を見たガキ大将が泣いて去っていったぐらいなのだから。

…いいさ、もう慣…慣れねえーよ!!!俺は心優しいんだ!!!前の村でもそうだ。転んだ婆さん助けたのに引つたくりだと抜かしやがったし!!!!

はあ、さっさと宿見つけよう

少し凹んだ雷聖の顔は周りから見ると影が濃くなり般若の如き恐ろしさとなった。雷聖の行く道は人が恐ろしさのあまり行く方向の人垣が別れ、雷聖の通った道の方は雷聖を魔物の類かと疑る目で見送った。

「ああ、死んでないけど生き返るなあ」

太陽の香りがする寝台の上で前の村から楽しみにしていた柔らかさが体を包み雷聖を眠りの世界へと誘う。

「明日は役所で求人板を見てから食料を、買出し……して……ぐうー……」

旅をしていた体はあっさりと眠りの世界へと意識を旅立たせてしまった。

翌朝、視線が集まり居心地が悪かった朝食を済ませ。昨日脱いだままだった防具の点検をし、旅のせいでサボりがちだった細部の部分まで丹念に磨き上げた。

「結構汚れ溜まってたな。今度また鍛冶屋で点検ついでに磨いてもらおう。あゝ、まだ昼飯にしちゃ早いな。

服を洗い屋に持っていくついでに昼飯食って求人板でも見とくか。食料は……明日で」

あまり長居をするつもりのない雷聖だが近い村まで最低で3日も歩き続けなければならぬので、ついつい滞在期間を延ばしてしまう。一人旅なので誰も文句を言う人はいないが。

洗い屋で、着ていた服も洗ってもらい、求人板を見に行くために役所がある町の中央まで足を進める。普段はズボンのため着物が着崩れしてしまい直しても直ぐにまた崩れるのでそのままにしておく。そこいらに居るチンピラのようになっている。

周囲の人達の反応も昨日より酷くなってしまう雷聖はもの凄く落ち込んだ。

疲れる……いいのが無かったらさっさと帰るか

10級〜7級までとその他の求人が貼り付けてある外の求人板は無視をして役所の中に入っていく。役人たちも雷聖の髪や顔を見て顔を合わさないようにそそくさと立ち去り受付の人や対応をする人は担当になったらと青ざめている。

雷聖は心の中で静かに泣いた。

できるだけ無表情をしたがそれがかえって微かに怒っているように写って役人達は慌てた。

半ば諦め6級の求人板を見た。

雷聖が一人で倒せるのは6級までなのでいつも6級のものでいいのが無ければさっさと帰るのだが今日はついつい5級の求人にまで目を移した。瞬間、神経が目集まる。

こ、これは5級の求人か！？火吹き狐海豚きつねいるかの退治がこの時期5級なわけあるかよ！！！礼金は5級のまま！！依頼日は昨日か！！依頼したやつはアホだな。くくくっ…

雷聖は怪しい笑みを浮かべた。周囲の温度が2度ほど下がる。

求人書を乱暴に取り受付の所へ持っていく。受付の人は顔が真っ青で泣きそうだ。

「これ、請けるぜ」

「は…はい…」

震える手で受け取り依頼書に書き込んでいく雷聖がじいゝと監視をするかのように見てくるので字が震え少し見にくい。

「あ…あの、この依頼2名以上じゃないと受けられないんですけど…」

「ああ！！？なんだと！！んなものなんとかしろ！！」

あまりにもいい求人を人が足りないということだけに手放したくない雷聖は苛立ち受付の人に威圧的に迫った。自分の敵つい顔を利用して。

「ひい…こ…こちらとしても規則なんで…」

受付の人は情けない声を出しながらも雷聖に立ち向かう。後の方で同僚と思われる人が今にも拍手をしそうな勢いで心の中で応援している。

受付の人は雷聖の睨みを受けながらも引く気配はない。雷聖は奥歯をギリギリ食いしばる。

「じゃあ、今から探してくるからその求人を取って置けるよな？」

出来るよな？ともう一押ししておくのを忘れずに付け足す。受付の人は耐え切れずに頷く。ニイツと笑う雷聖は餌を前にした魔物だった。そして急いでもう1人の仲間を探すために去って行った雷聖を見ながら受付の人は生きている喜びを同僚と分かち合っていた。

「あゝめんどくせえな。というかこっちの地方はしばらく魔物が休眠期になるから武人は少ねえし。いざとなったら暇そうなやつ1人引っ掛けてくるか」

役所内には武人が居なかった為、外の求人板の方を見てみようと思っただけに出た瞬間。1人の少年とぶつかりそうになる。だが雷聖はぶつかりそうになったことよりも他の事に気を取られた。

あまりにも突然だった為、雷聖も完全にぶつかったと思ったのだが、少年は前の方にかかっていた重心を前に出していた右足で瞬間的に後ろの方へ押し戻しそのときに体を少し浮かせ滑るように後ろに移動した。

簡単に言う也确实にぶつからない距離まで雷聖が反応できない速さで後退したのだ。

しなやかに、まるで風に吹かれる柳のように体を扱うその様は、雷聖の中に印象強く残った。

一瞬であんな移動ができるなんてすげえ。刀を持ってるってことは

武人か。14〜16歳ぐらいか。珍しくないが、あの技術はそれなりに強い流派の武術を教えられてるな。こいつなら火吹き狐海豚の退治にいても足を引っ張られることもなさそうだな。

自分がじい〜と観察していることに気づき、相手をあまり怯えさして逃げられては堪らないと今までとは違う笑みを浮かべた。少年が目を白黒させている間に用件を済ませる。

「あんた武人だろ？俺は志真 雷聖。依頼を請けよと思ったんだが2人以上じゃないとできないって言われたんだ。頼む！！一緒に請けてくれ！！」

混乱しているであろう少年は頷き、雷聖は心の中で怪しい笑みを浮かべた。正気に戻る前に腕を掴み役所の中に引っ張っていった。そしてさっきの受付の人がまた真っ青になって対応した。

「これで2人だ。文句ないだろう？」

受付の人はコクコクと頷いて先ほどの依頼書を取り出し書きを書いて最後に印を押し雷聖に渡した。雷聖は受け取り必要などころがしっかり書かれているか確認する。

「よし、ありがとな」

後の方で待たせていた少年を見て頑張ろうなと先ほどのいい笑みを偽りなく浮かべた。

まだ先ほどの混乱が続いているのであるう少年を見ていて雷聖は心のどこかでこの少年とならどれだけ危険な魔物でも倒せる気がして

いた。

どれだけ強い味方が居ても魔物を倒す前は不安が消えないが少年の気配を感じていると安心感のようなものが心のそこから湧き出てくる。

不思議な少年だなと思う雷聖だった。

第七話

雷聖 side . . .

「あいつどつか怪我でもしてるのか？診療所で泊まってるとかありえねえ。金がないのか？あのくらいの技術を持ってるやつが金に困ることはねえだろし…」

昨日役所で別れるとき雷聖の宿の方を待ち合わせにしようとしたのだが分からないと少年が言ったので少年が泊まっているところを聞くと村の診療所と言った。そして少年と別れてから雷聖の悩みは尽きなかった。

怪我をしている場合自分と少年を巻き込む形で下手をすれば死ぬことになる。よくても少年の怪我を悪化させる可能性もある。

金がないということなら何も問題はないのだが。悩んでいるうちに朝になり診療所に少年を迎えにいく頃合になったので今は診療所に向かっているところだ。

というかあいつ無口すぎるだろ。まだ名前教えてもらってねえーし！！泊まってるどころ聞き出すだけでも時間結構かったし！

あこが診療所か。入り口のところに誰か立ってるな、あいつじゃなさそうだし医者か？

診療所の入り口には先生が立っており誰かを探すようにあちらこちらをキョロキョロと見回して、雷聖の方を見て目を止めた。そして雷聖が診療所の入り口のところまで行く前に先生も歩を進めてきた。

「あゝ、このぐらいの無口なガキ泊ってますか？」

とりあえずできるだけ丁寧な言葉遣いをした雷聖。雷聖の中では少年はここに居るといふ簡潔な答えを期待している。
が、先生は雷聖に目を合わせると

「あなたですか」

「はいっ？」

先生の目は何故か力が入り、もはや睨んでいるとしか言い様がない状態だ。

「あなたが虎侍君をかどわかって無理矢理……」

「ちょ、ちょっと待て、どこでどついう誤解をしてるんだよ！」

危ない方向へ行こうとしてるところを慌てて止める。雷聖にはそんな趣味はない。断じて。
だが先生はまだ睨み続ける。

「虎侍君は記憶喪失なんですよ！それなのに魔物退治なんて……どんな酷いことをしたんですか……！」

虎侍つてのは、あいつのことか。酷いことって確かに少し混乱してるところで強引に依頼に巻き込んだけど……ん？今とんでもないことを聞いたような……

「は……？記憶喪失？……！！！」

「そうですよ！虎侍君は8日前に瓦が頭にぶつかって記憶喪失になったんですよ！！旋術だって5日前にできたところですよ！！」

「い、5日前って、ということだよ！俺は聞いてねえぞ！！」

少しずつ視線が集まってくるのが先生と雷聖は気付き

「とりあえず中で話しましょうか」

「そうだな」

診療所の中へ入っていく2人。中に入って気になったことを先生に問う。

「ところで、あいつ…虎侍だっけ？どこに居るんだ？」

まさか、逃げたってことはねえだろうしな。

「虎侍君には奥の倉庫で荷物の整理をもらってますよ。あなたが来たら教えると言ってあるので私が呼ばなければ来ませんよ」

随分と用意周到だな。

「そうか。で、あい…虎侍はあんたに何て言っただ？俺はただ依頼と一緒にする予定だぞ」

「ええ、あなたに誘われて依頼に行くことは聞きました」

「だったらなんであんなことになってるんだ？」

「虎侍君は5日前に融蜘蛛いたちぐも一体ですが倒しました。そしてそのときに旋術を偶然といいますか、使用できるようになりました」

「なっ！！融蜘蛛は6級の中でも中位の強さだぞ！！そんな偶然とかで倒せる相手じゃねーし！！」

やべえ混乱してきた。でもそれなら強えっただけじゃねえか？俺は強えのは歓迎だけどこの態度とは関係なさそうだな。

冷静に推測していく雷聖。

「私はその後に虎侍君の顔を見ました。そのときの虎侍君はとても苦しそうな顔でした。私の推測では虎侍君は例え魔物であっても殺すという行為を嫌っているのではないかと思います」

悩ましそくに話す先生。

「けど記憶は無いんだろ？」

記憶が無いから記憶喪失なんだろ？わけが分からねえ。

「ええ、ですが無意識のうちのこともあります」

分かるような、分からないような…

「そうか、なら一度しっかり聞いておいたほうがいいな」

雷聖は席を立とうとしたが

「ちょっと待ってください」

「あつ？」

服の袖を掴まれる。

「たしかに虎侍君は殺すという行為は嫌っていると思いますが、あなたと依頼に行くということは心なしか楽しみにしていました」

「はあ？こっちは子守をしてるわけじゃねえぞ。楽しみにしているとかいう理由で居られるとこっちが危なくなるんだよ」

武人にとって一緒に依頼に行くものは命を預けるのも同然なものだ。それを楽しみなどとまるで遠足にでも行くような気持ちで居るのは命がいくつあっても足りないという心境になってしまふ。心が安心できなければ魔物との戦闘中に気が逸れ、そして命を落とすことになる。雷聖は何度かそんな光景を見たことがあるため余計に敏感になってしまふ。先生も雷聖の言うことは分かったのだろう目を瞑り何度か小さく頷き。

「では、依頼の町まで聞くのは待ってもらえませんか？」

「なぜ？」

「虎侍君はあなたとの依頼を終えた後記憶を取り戻すために旅に出ると言っていました」

「初耳だな。それは」

今日は初耳が多いな。

「そうですか。私と虎侍君が会ったときは旅をしているような感じでした。そのときには恐らく記憶を無くした後だったのですね。あなたは人が記憶を無くすという原因はどこにあると思います？」

突然問われ戸惑う雷聖。

「いきなり言われても、俺にはどうとも言えねえな。だが虎侍は瓦で頭を打ったんだろう？それが原因じゃないのか？」

今までに聞いた話を思い出し無難な答えを出す。

「私は人が記憶を無くすという主な原因はその人の心にあると思っています。自らが強く願い、そのきっかけがあれば記憶喪失ということになると」

そう言われるとそんな気もしなくは無いがどうもな…あいつのきっかけは瓦か結構痛いな。

「虎侍が記憶を無くした原因は虎侍の心が記憶を無くしたいと自分から願ったからだ？」

どうも腑に落ちないな。

「そうとも言い切れませんが。虎侍君のような子がそれほどまでに拒絶した記憶はとても辛いものかもしれません。そこでもし虎侍君に何かあればあなたに守ってもらおうかと思ひまして」

なるほどな、護衛代わりってか。

「それでなぜ依頼の町までなんてことになるんだ？」

「それは…情が移ればと」

「おいおい、情が移ればって動物じゃねえんだし。それに俺は誰ともつるむ気はない、今回は人数の条件があつたからだ」

「そこをどうかお願いします。虎侍君に旅で必要なことを最低限でいいんです教えてもらえませんか？多分虎侍君はあなたと一緒にいけないでも1人で行ってしまうでしょうから」

フーとため息を吐き頭をガシガシと掻く。

「そういうことなら仕方ないな。どつかでくたばってたら夢見が悪くなるし。依頼の町までだ。そこまでに俺が必要最低限のことを教える。そこで魔物を殺すのが無理ならそこでお別れだ」

あー厄介ことは嫌いなんだけどな。

「分かりました。騒いだりこんなことをお願いしてしまつてすみません。本当は私が行ければいいのですが、そうするとこの町の医者居なくなつてしまうので…」

「別にいい。この町から医者連れ出した理由になつて怨まれたくないしな」

雷聖がそついうと先生は笑い出す。

「何だよ…急に笑い出して」

「い、いえ。あなたの髪のせいで私はどこか誤解をしていたようです。すみません」

目じりを拭いながら先生は言う。

「なるほどな。まあこの髪で誤解されなかった日は無いけどな」

「重ね重ね、失礼しました。…そろそろ虎侍君を呼んできますね。」

先生は一礼してから診療所の奥の扉に行こうとするが

「あ、名前を聞いてませんでしたね」

雷聖は少しばかりとしてから苦笑いを零す。

「志真 雷聖。あんたは？」

先生はにっこりと笑い。

「佐久間 大善です。あ、少し虎侍君に持たせたいものがあるので時間をもらってもいいですか？」

「ああ、できるだけ手短にしてくれよ。日が暮れる前に安全な場所を確保したいからな」

「はい、ありがとうございます」

バタバタと去っていく大善を尻目に親バカを見ている気分になった雷聖だった。

第七話（後書き）

今回更新が遅くなりました。 m - - m

多分これから更新は遅くなってくると思いますが30話くらいは続けようと思っているので応援よろしくお願いします。

第八話

虎侍 side . . .

今日は朝から荷物の整理という名の大掃除をさせられた。俺今日、今から旅に出る予定んだけど…しかも今の時代、車なんて便利なものなんてないだろ？一日歩き通しなんてざらになるんだろ？な。何でもつと文化が進んで交通手段が便利になっている時代にならなかったんだろ。いやその前に異世界に来たところから何とかならなかったんだろ？か…思ってみてもどうにもならないな…でも帰る手段探さないといけないし
Help me!!!!!!家に帰してー！ー！ー！もうこの際宇宙人とかでもいいから助けて！！

何も起こらないぜ……悲しい。

「虎侍君？どうかしましたか？」

「いえ…」

「そうですね。あとこの傷薬と包帯と腹痛に効く薬も入れときますね」

「…はい」

荷物整理が終わったあと先生が来て慌しく色々旅の荷物を詰め始めた。大きい目の鞆なのにもうパンパンだ。

どんだけ入れるんだよ。鞆がはち切れるって。服は思ったよりかさばらなかつたのに、あーそんなにギュウギュウ圧したら駄目だって！！！！

「これくらいあれば大丈夫でしょう」

先生すげーいい汗掻いてるし。鞆が最初の3分の2ほど膨らんでる。服の他に何入れたんだ？

「はい……」

「遅かつたな」

あ、昨日の確か志真 雷聖とか言う人。やつぱり髪、赤いな元の世界でも結構目引くねえ。あれって地毛？天然ものだろうな。すげー。というか着物じゃないんだ。

雷聖は昨日のうちに洗い屋から服を受け取っていた。甚平の作業服のような服を着て靴はブーツのような頑丈そうな靴に、腕には肘まである手甲。腰には革のベルトに小太刀を差し、首にはアクセサリのように大きな目の鎖を巻いていた。

「すみません。あ、これおにぎりです途中で食べてください」

え、いつ作つたんだ？ずっと居たよ？詰め始めたときに3分ほど居なかつたけどそのときか？こっちもすげー。

「ああ、ありがとう。虎侍も準備はいいか？」

雷聖は何かの葉のに包まれている2人分のおにぎりを受け取りなが

ら虎侍に聞いた。

「…大丈夫……」

あれ、俺、名前言った？でも今言ってたしいか。

自分の中で疑問を完結させる虎侍。

雷聖は扉の方にもう進んでいる。慌てて荷物を背負って追いかけようとするが、思った以上に荷物が重かった。

ええ？！多い！！重！！あー！！旋術使お。

瞬間、全身に『旋』が駆け巡る。そして荷物は簡単に持ち上り、虎侍は雷聖を追いかけて扉を潜る。町の活気にもそこそ慣れてきたが、今日でお別れだと思うと少し寂しい。

「虎侍君、記憶が戻っても戻らなくても一度は帰ってきてください
ね」

「…はい…ありがとうございました…」

別れを惜しみつつ診療所を後にする2人。

歩いていると町の人の視線が雷聖の髪の毛や瞳に集まっているのが分かる。

やっぱりどこの世界でも赤い髪って目を引くのか？元の世界でも赤毛は一番少ないらしいって聞いたことあるし、でも本当に色々髪の毛があって面白いな。俺も茶髪に染めたかったけどじいちゃんに怒

られたしな。怖かったな。あの時は……

雷聖はあまり気にしていないようなので虎侍も気にせず黙々と歩いていく。門を潜り街道を歩いていく。全く喋ることのない2人。

「氣まずい！！！！ヤバイ！！なんか氣まずい！！でも俺からは無理！話せない！！だつて敵ついんだもの！！笑つた顔は以外と優しそつだつたけどやつぱりちよつと無理がある！！てか俺無口過ぎる！！！！ここは怖くてもよろしくとか言つとこいろだらう！！！！」

.....

あああああ！誰か俺に話術を教ええええええええ
！！！！！！

「虎侍。お前、記憶喪失なんだってな」

は、話しかけてくれた！！！！これならいける！！！！

だが、口は動かずコクリと頷いただけだった。

な、なぜだ――！――！！！！俺の口はお飾りかあああああ！！あれ、なんで知ってるの？先生か？あ、もしかして名前も先生が教えてくれたのか？ってか俺、旅にまで出て記憶喪失の設定使わないといけないのかよ！！いや、まあ危なくなったら使う予定だったけどまだ全く危なくないよ？自転車を補助輪付けて走っているようなもんだよ？

「先生に言われてな。お前に1人で旅をしても大丈夫なように最低

限のことを教えることになった。依頼の町まで5日はかかる、その間に出来るだけ教えるからちゃんと覚えとけよ」

「分かった…」

先生ありがとーーーー！！正直言つてこの世界の金銭とか常識とか全く知らないし。俺1人では思つてなかったけれどぼつたくられても全く分からないところだった。危ねえー。旅は計画的にしないとな。

「まあ、その前に荷物持つてやる。旋術使い過ぎると倒れるぞ」

「…大丈夫……」

虎侍の返事も受け流し、ヒョイと虎侍の背負つていた荷物を奪い楽々と荷物を持つ雷聖。意外と逞しい体をしている。

「お前が倒れたら荷物が増えるだろ？」

ああ。俺が荷物になるってことね。あれだけ重い荷物持つてるのに旋術使つてる気配全くしないし。昔の人はすげーな。あ、でもここ異世界だ。

この後昼食を食べるまで歩き続け、その間様々なことを雷聖は虎侍に教えた。

この世界の通貨は元の世界の1000円玉ほどの大きさに1銭、2銭で呼ばれている。1銭の価値は、大体もとの世界の100倍つまり1銭は元の世界では1000円の価値になっている。

一食を飲食店で買うなら10銭ほど。宿なら30銭。1銭未満の物はまとめ売りになっている。

そして1000銭は500円玉ほどの大きさになっている。そして1000銭は商人などのお金を扱う者しかもって居ないが。500円玉を一回り大きくなって分厚さも2枚分の大きさになっているらしい。

雷聖は1000銭までしか持っていなかったので1000銭の実物は分からなかった。

ここで昼食を食べ一息つきそしてまた歩き出す。この時点で虎侍の中では徒歩で進んだ距離は過去最高に達しようとしている。

魔物は休眠期を北と南で交代するようになっていた。今2人が居るサハサラ地方は南の方で、今は南が魔物は休眠期となっている。武人はそのため今は殆どが北の方へ行ってしまう、少し大きい町などでは数人の武人を雇うところもあるらしい。

武人は東と西の魔物を倒すことを主に行っている。そして東と西には武人専門の大きな町があり、そこに拠点を置くところが多いらしい。雷聖は気ままな一人旅をしているため拠点を持っていないが将来的には持ちたいと言っていた。

そして北と南は都の役人が魔物を倒すのことを主に行っている。だが、役人が足りないときなどは旅をしている武人に依頼をするために求人板を作っている。

求人は7級までは武人として生活をしている人でなくても倒せるため一般のものとして扱っているが6級からは武人が専門としないと危険なため役所の中で扱っているらしい。

外の求人板に張ってある求人は役所で依頼書として契約をしたという証を必要としていない、そのかわり魔物を倒したという証のために魔物の一部を持っていかないとけないらしい。

結構グロいぜ…一部って耳とかそういうのだろ。俺無理…5級でよ

か……

全然よくないああああい５級なんて無理だよー！！！！なん
か前にも言っただけで無理——！！！！

ただ歩いただけで夜になってしまい、雷聖が安全な寝床として、旅
をする人達が安全のために野営をしているところがある。宿などは
ないが移動式の屋台が数件あるので商人たちや旅をしている人達で
そこそこ賑わっている。今日はここで一夜を過ごす。虎侍は、野宿
が初めてなので少しワクワクしている。

夕食を屋台でとり野営の喧騒の中、夜は更けていった。

第八話（後書き）

ちよつとスランプ気味……更新遅くなりそうです。更新はしていく予定なので暇つぶしに見ていつてくください。

第九話

虎侍 side . . .

旅に出て7日目やつと依頼の町ダルダストに着いた。アカヤクと変わらないほどの活気に溢れている。久しぶりの雰囲気少し萎縮しうになる虎侍だった。

7日かかったのは途中、火のおこし方や魚の取り方や怪我に効く薬草など、1人で旅をしても大丈夫な最低限を教えてもらったために少し寄り道をしたためだった。

あゝ、疲れたゝ早く休みてえゝゝゝ一週間歩き続けとかありえねえー！ー！！現代の若者の体力なめんじやねえー！ー！！………疲れた………

表情など表には出ていないが虎侍の疲労はピーク状態だ。

「ふゝ、長かったゝ。まずは宿だな宿」

町に入って少し行ったところに分かりやすく「旅の宿」と看板を出してある宿に入る。雷聖は旅に慣れているためまだまだ元気そうだが宿は二人部屋をとり風呂は向かいの銭湯と業務提携しているらしい。部屋まで案内してもらい食事はいつ頃がいいかなど細々としたことを聞いてきて雷聖はスラスラと答えている。

あんまり考えてなさそう。まあいいけど。というか業務提携してるんだ。意外と進んでるんだな。

雷聖は店の人が居なくなるなり畳の上にゴロンと寝転がりゴロゴロ

し始めた。

おお！休日のお父さん現る！！

「あゝ極楽。ああ、虎侍風呂に行きたかったら行ってもいいぞ今日は一日休みだ。明日から色々するからゆっくりしとけよ」

「…分かった」

とりあえず荷物の整理を始める虎侍。旅のときはあまり中を見ている暇がなかったのでマジマジ見るのは初めてになる。一番上にある先生にもらった長着3着を出して奥のほうを見る。包帯や傷薬や小壺に入った薬があり、蓋のところに簡単に薬の効果を書いてある。だがその中の3つだけ蓋に何も書いてない小壺がある。

何だこれ？先生、間違って診療所で使うものでも入れたのか？

小壺を手にとって悩んでいると雷聖が不思議に思っただって来た。

「何かあったか？」

虎侍は無言で小壺を雷聖に差し出す。雷聖は小壺をじいーと見てから臭いを嗅ぐ。

蓋をしたままじゃ臭いは分からないだろ…

そして臭いで分からなかったから開ける気になったのか蓋を開け始めた。カサカサと音をして蓋を開けたが雷聖は中身をまたじいと見始めた。虎侍はどんなものか気になり少しドキドキしている。観察をしていた雷聖は小壺の中に指を入れて指の先にほんの少し付い

たものを舐める。瞬間、雷聖は小壺を置いて備え付けの水を慌てて飲んだ。

ど、毒か？救急車 come！！！！あつ無理だ！え、えーつと医者だ！！医者 come！！

「苦っ！！」

虎侍が心の中で慌てて少し混乱しているときに、雷聖は水を二杯飲み終え虎侍の無表情の視線に気付き、小壺を指差して

「薬だ。満楼普っていう若返りに効果があるって噂の薬だ」

若返り…これ以上若くなっても意味ないだろ…先生、一体何がしたいんだ？

「明日、ついでに売るからな」

「いいの…？」

返したほうがいいんじゃないのか？高そうだし。

「こついつのは高く売れるからな。覚えとけよ」

高く売れるって断言してるのに返す気全くねえー。しかも覚えとけって…オイオイって感じになるねえー。

雷聖は小壺を置いて鞆の中をゴソゴソとあさり始めた。

えー。一応俺の鞆なんですけど…

残りの2つの小壺も出してさっきの小壺と一緒に置いている。おそらく明日売りに行くものだろう。

「風呂に行こうぜ」

いつの間にか外の景色が夕日によって朱色に染められていた。虎侍は蓋に何も書かれていないもの意外を手早く鞆に入れ、着替えの長着を出して、先に行った雷聖を追いかけていく。

あゝいい湯だった。日本人はいい湯に浸かると元気が出るんだよ。

向かいの風呂は5つの浴場があり、温度がそれぞれ違い中々楽しむことが出来た。虎侍は熱い湯は苦手だったので温い方の湯に長々と浸かっていた。雷聖は熱い湯を巡って虎侍より先に上がっていった。部屋に戻るとちょうど夕食が運ばれてきた。旬の食材が使われてとても美味しそうだ。

おおっ！！うめえ〜〜山菜の旨みが染み渡る。元の世界じゃ高級料理並みだな〜サイコー！！！！

雷聖の方を見るとガツガツと食べている。食欲をそそる勢いだ。

日本料理のように綺麗に並べられていた料理を綺麗に食べ満腹になった虎侍と雷聖は温かいお茶を飲みながら和んでいた。まるで旅行に来たみたいだ。

「あゝ、虎侍食後で悪いんだが…」

雷聖が歯切れ悪く言う。虎侍は顔を上げて聞くをとる。

「えーっとな。お前は生き物を殺すということはどう思う？」

「…いけないこと…だと思う」

当然なんだ？まあ生き物を殺すなんて悪いことだろ普通。動物虐待とか聞いているだけで嫌になってくる。

「そうか。魔物でもか？」

魔物か…どうなんだろ？ゲームとかだったら悪者として出てくるけど、それはやっぱりゲームの中だけだし。虫でも農作物を駄目にする虫も居るけど、ミミズとかみたいに益虫も居るわけだし…うーん…

「害があるなら、殺すことも…必要…」

雷聖は虎侍の答えを聞いて少し悩んでいる。

え？俺悪いこと言った？でもそういうもんでしょ？ちょっと心配になってきた…

「今回の依頼の魔物は害のある魔物だが大丈夫か？」

その大丈夫は殺せるかって聞いているのか？

虎侍は頷く。雷聖はどこかホッとしたようだ。

「じゃあ、明日準備をして、明後日には依頼をするぞ」

虎侍はまた頷く。その後はまたこの世界の常識を少し教えてもらい就寝となった。

そつえば俺魔物の退治しに来てたんだな…またあの蜘蛛みたいなでかいやつかな？

虎侍は布団の中に入りながらこの前倒した蜘蛛を思い出した。真っ先に思い出したのはタランチュラのように長い毛だった。背筋がぞつとしたので思い出すのをやめて寝ることにした。久々の布団はあつという間に眠りへと誘ってくれた。

翌日は朝から服を洗い屋に持っていき、薬屋にあの小壺を売った。かなりいい値で売れた。そのお金は雷聖が要らないと言って虎侍に渡した。その後役所に行つて雷聖は依頼のことについて少し話していた。役所の中には武人が数人居た。

虎侍は雷聖以外の武人を見るのは初めてだが鎧のようなものを着ている人や急所だけを守る防具を付けた人が居た。

一方雷聖は手甲と靴に多分鉄のようなものが仕込まれたもの、あとは鎖帷子くさりかたびらを着ているだけだ。鎖帷子といっても魔物の一撃を食らえばひとたまりもないような物だ。

そして虎侍は刀を一振り腰に差しているだけだった。

……俺、初期装備だけだよ？ヒノキノ棒とお鍋の蓋だけのような感じだよ？

…しかも敵はスライムとかみたいな弱いんじゃないよ？

俺マジ死ぬ！！行きたくねえ！！！！！！

虎侍が命の危機を感じているとき雷聖は役人と話を終え戻ってきた。

「そろそろ昼飯でも食うか」

そう言って歩き出した。虎侍はついていきながら

俺、今それどころじゃねえんだけど！！虎侍、異世界にて没！とか
シャレにならねえんだけどー！！元の世界に戻してー！神様仏様
ー！ついでに女神様ー！！

虎侍の願いも空しく翌日の朝日は昇ってしまった。朝早くから火吹き狐海豚が居る森の奥に出発した。

俺、生きて帰れるの？…

朝陽が眩しい朝だった。

第九話（後書き）

どうも、スランプは脱した気はしないけど小説の神様が降りてきたので早く更新できました。

あとユニーク数が3千に達しました。日ごろ読んでいただいている方感謝します。これからも頑張ります。

第十話（前書き）

残酷表現入ってます

第十話

雷聖 side . . .

はあゝ、しまった… 本当ならあんまり連れてきたくなかったんだよ。もし途中で急に倒れたりとかしてついでに魔物が直ぐそこまで迫ってたりしてたらどうにもならねえし… 放置しとくわけにもいかねえし… はあ…

今、雷聖と虎侍は黙々と山奥に向かっている火吹き狐海豚の討伐のためだ。そして雷聖は記憶喪失になっている虎侍の同行を許してしまった自分に呆れていた。

まあ今の時期の火吹き狐海豚、数匹ぐらいなら俺1人で事足りるだろうな。

昨日役所で詳しいことを聞くと、山の方で仕事をしていた男達数名が火吹き狐海豚を数匹見かけたとの事。そのときは事なきを得たが次に山に行くときに危険になるので退治してほしいという依頼だ。このような依頼は珍しくない。個人が依頼したのなら相場とずれていても疑うことはないが、役所の中に張り出されているものは常に依頼人にちゃんとした確認をするのであまり相場から外れることはない。そのため、休眠期に入った火吹き狐海豚が5級になっているところがだんだん怪しく思えてきた雷聖だった。

まあ、あまり疑って一度請けた依頼を辞めたりしていたら知名度にその噂が入りいい依頼が個人的に入らなくなってしまう。

手に負えそうになかったらさっさと引き揚げるか。

「そろそろ現れるかもしれないから気をつけるよ」

ちょうど火吹き狐海豚のつけたものであろう草に焦げ跡があり虎侍に注意を促す雷聖。

「分かった…」

虎侍は刀の鯉口をいつでも切れるようにする。雷聖も歩きながら手甲微調整していく。

耳を澄ませたときに森が切り開けた場所から物音がする。

雷聖は物音があまりしないように注意して歩いていき、どこから襲われても常に対処できるように体の隅々まで意識を巡らせる。

だがまだ旋術は発動させない気配が急に変化すれば向こうも襲撃されないように戦闘態勢に変えてくる。出来るだけ危険を減らしたいので敵が現れるまで発動はさせない。

虎侍にも出発の前に言っておいたので旋術は発動させていない。

そして森が途切れたときに見たものは小さい丘のようになっているところに70匹は居るだろうと思われる火吹き狐海豚だった。

体は雷聖の腰までしかなく背中に背びれがあり、意外とすばしっこい。2、3匹で連携をとるようにこちらを狩ってくる。

雷聖はこんなに火吹き狐海豚の大群を見たことがない。せいぜい多くても2、30匹がいいところだ。だが今回はその倍ほど死ぬ気で倒しても半分が限界だろう。もちろん虎侍を守っている余裕はない。

これは無理だな。腕っ節があるやつ4、5人は必要だな。俺もあいつらに囲まれると足が付いていかねえ。幸いこつちが風下か…風の向きが変わる前にずかるか。

「虎侍、無理だ。引くぞ」

言い終わるのが早いか、急に風の向きが変わる。
こちらが風上になる。

「ちっ！虎侍走れ！！俺が食い止める！」

雷聖は腹を括る。だが虎侍は動かない。雷聖を見て首を横に振り。

「行かない」

と一言。

そして火吹き狐海豚が臭いに気付き一斉に雷聖達に向かって走り出す。

「なっ！お前は俺が巻き込んだんだ！！さっさと行け！！」

「行かない…俺は…自分で選んだ」

普段あまり喋らなかった虎侍が普段より強く言い雷聖はたじろぐ。
もうそこまで火吹き狐海豚は迫ってきている。雷聖は奥歯を強く噛み旋術を発動させる。

「俺の後ろの方で戦え！！危なくなったら直ぐに逃げろ！！いいな
！！」

虎侍の返事を待たずに走り出し、少し遅れて虎侍も動き出す。旋術も発動させているところまで確認して雷聖は火吹き狐海豚に集中する。

足と腕に旋術を集中させて飛び掛ってきた1匹を殴り飛ばす。そして2、3匹と倒したときには囲まれてしまった。余った火吹き狐海

豚は虎侍の方に向かっている。

四肢を自在に操り死角を作らないように倒していく。まるで荒々しい一匹の獅子のように火吹き狐海豚を蹴散らしていく。

「おおおおおっ！！！！！！」

何十分戦い続けたか分からない。火吹き狐海豚の爪や牙が時々掠り少しずつ雷聖に傷を付けていく。まだ40匹ほど残っている。

雷聖は一撃一撃に力を籠める戦い方が本来のもので、素早い敵は数が多いほど立ち回りがうまくいなくなる。

今もだんだん動きが鈍ってきている、比例するように傷も増えてくる。足元には火吹き狐海豚の血と雷聖の血が少量と死んだ火吹き海豚の死骸などが溜まってきている。場所を変えなければ足を取られてしまう。

くそっ！！多い！

雷聖は焦り、少し足元から注意を逸らしてしまう。そして

ズルッ！

「うおっ！！！」

案の定、足を取られ体勢を崩してしまう。火吹き狐海豚はここぞとばかりに大量に襲ってくる。雷聖は起き上がるかと追撃をするが上からの攻撃のほうで幾分か強い。

ここまでか…金に目がくらんでこの様とわな。嫌な最後だな。

雷聖は覚悟を決めかける。そのとき、上に乗っかっていた火吹き狐海豚の首が飛ぶ。恐ろしいほどの血が雷聖にかかる。雷聖は血を無視して急いで起き上がる。火吹き狐海豚の攻撃がないので辺りを見ている。そこには虎侍が掠れるような速さで火吹き狐海豚を次々に倒している。

後ろから襲いかかってくるものは後ろに振りかぶるときに串刺しにしてしまう。そして前のほうに居るものは串刺しにした物を抜くときの反動で常に2匹以上を巻き添えにして切り捨てていく。あまりの速さに急停止するときには死骸を巻き込んでいる。

ズシャッ！！

グチッ！

パキッ！！

ザンッ！！！ブシュッ！！！

先に雷聖の周りの火吹き狐海豚を一掃し、5秒もかからない内に雷聖の体勢が立て直せるほどの距離を稼ぐと後方に走っていく。虎侍が元々相手をしていた火吹き狐海豚の方を倒しに行く。

あいつ一体何者なんだ？あんな速さで戦うやつなんてそういないぞ…

あまりにも洗練された動きに見とれていた雷聖はハッと気づき、体勢を立て直し直ぐに近くに居た火吹き狐海豚を倒していく。

それから優に1時間半かけて全ての火吹き狐海豚を倒しきった。最後の方は逃げようとするものを倒すのに手間取ったが虎侍が走りわりと早く終わった。

そして今は倒した火吹き狐海豚の死骸に腰掛けて休憩している。

ああー！！終わったー！！！！数が数なだけに疲れたー…

ふうと息を吐いて虎侍の方を見る。今は雷聖に背を向けるようにして座り、刀に付いた血を着物の袖で拭っている。

着物は雷聖も虎侍も返り血がついてたり泥が付いたりボロボロだ。雷聖は噛まれたり引つかかれたりしている。虎侍は走ったときに死骸の牙や爪に引つかかって袴の裾の方が酷いありさまだ。だが、お互いに擦り傷や軽い切り傷だけで重傷なものはない。

そういえば俺はあいつに助けられたんだな…最初に助けねえといけねえと思つてたのにこの様じゃな…

雷聖は苦笑いを零す。虎侍は刀を拭い終わったようで刀を仕舞い雷聖のほうを見た。雷聖は自然と感謝を伝える。

「虎侍、ありがとうな」

虎侍は少し間をおいてコクリと頷く。間が少し気になるが

「お前、組に興味あるか？」

沈黙が続き雷聖は無理かと落胆する。

「…組…？」

ただ知らないだけだったようだ。雷聖は思わず笑ってしまう。

「ははは…悪い。帰りながら教える」

雷聖は立ち上がりながらいい。虎侍が頷くのを見て歩き始める。虎侍も後に続く。

今まで組を作ろうと思ったことなかったけど何だろうな。本当に面白いやつだ。ああ、そういえばあいつもそろそろ戻っている頃だろうな。合流するか…虎侍のこと、どう説明するかな。あと、役所で情報に誤差があるって抗議してやろう。礼金増やしてやる。くくく。

雷聖は虎侍に組のことを話しつつ山を降りていく。夕方ころには町に戻っているだろうなと思いながら。

第十話（後書き）

友人が虎侍のイラスト書いてくれました。URLが長いので活動報告の方にのせます。虎侍の他に友人のイラストは1つ1つが個性的で面白いです。是非見てください。

第十一話

虎侍 side . . .

隠居のじいちゃんってこんな感じなのかなあゝ

今、虎侍は宿屋の一室で座椅子に座って温いお茶を啜っていた。のほほんという効果音が付けられそうだ。少し離れたところでは雷聖が休日のお父さんになっていた。

2日前依頼の魔物を倒し終え夕暮れ近くに町に着いた。町の人は返り血まみれだった虎侍と雷聖に驚いていた。驚いていた殆どの人の視線は雷聖の方に向いていたのだがあえて2人としておいたほうがいいだろう。

「虎侍ゝ昼になったら役所行くぞゝ」

買い物に行くぞゝ的な感じで言う雷聖。

「…分かった」

町に帰った日、閉まりかけの役所に行き依頼完了の報告をした。ついでに雷聖は情報の誤差がありすぎだと抗議して依頼の礼金に色をつけてもらうことに成功していた。返り血が付いたままだったので雷聖の顔はもの凄い迫力を持って話は意外とスムーズに進んだ。

いやゝ、あれは怖かったなゝ鬼が現れた！とか裏のほうで言ってたくらいだし。

依頼の礼金は、依頼の魔物が倒されているかどうかの確認が役所の

人が行つてから貰えるので早くて1日ほどかかり、虎侍と雷聖は昨日一日中休憩しそして一日経った今日礼金を貰いに行くのだ。

つてか新しい袴欲しいな。裾だけボロボロでかつこ悪いし。長着は先生からもらったのがあと2着あるけど余裕があつたほうがいいしな。一応金の方はあの薬で心配は要らないけど服を買うのって元の世界と同じ感じなのか分からないし…ああ、俺駄目っぱ…

虎侍が心の中で少し凹んでいると雷聖が虎侍の方を向いて

「ところで虎侍、組作るかどうかまだ返答聞いてねえんだけどどうなんだ？」

ああ…完全に忘れてた…組か…どうしよう。

町に帰るときに雷聖に説明してもらっていた組とは元の世界で言うチームのようなものだった。気が合った者や目的が同じ者達が集まり組を作り、依頼を共にするというものだった。

そして前に話していた東と西に拠点を作るのは組を結んだ人達がお互いに別の依頼をするようになったときに帰る家のようなものだ。大きな組となると拠点を持たないと宿屋をいつも借りているといくら依頼をこなしてもお金が足りるものじゃないらしい。

逆に数人で拠点を構えているところもあるらしいが結束力を高めるという点ではいいと雷聖は言った。

他にも大人数になると必然的にドンちゃん騒ぎをするときが多くなり宿屋だと迷惑がかかるというのが現実のようだ。稀にいい宿だと大人数の組が泊まることを断られるときがあるらしい。

世界が変わっても切実だな。まあ元の世界みたいに防音対策の手段が限られてるこっちの世界の人も大変だな。役人とかも24時間体

制じゃないみたいだし。そうすると先に断っておくほうがいい判断だよな。

ってか俺なんでこっちの世界の商売事情みたいなこと考えてるんだよ！えーっと、確か組を作るかどうかだっけ？

うん／＼入ったほうが元の世界に戻る手段を探すときに利用できるな。それに雷聖さんも基本的にいい人だし。特に嫌がる必要もないか…

「……いいよ…」

雷聖は虎侍の返答を聞いてなんとも嬉しそうな顔をする。

そういえば自分の拠点を持ちたいって言ってたっけ？それって自分の組を持ちたいってことか…夢があっていいねえ／＼

思考までも隠居のじいちゃんになりかけている虎侍だった。

「あ、あともう1人組に入るやつが居るから明日そいつのところに行くからな」

雷聖の言葉にコクリと頷く虎侍。そうしているうちに昼食が運ばれてきて役所に行く頃になった。

「それじゃ、礼金をたんまりとかつばらいに行くか」

かつばらいはやめようぜ…

心の中でそう思いつつ雷聖の後ろをくっ付いていく。

「ほ／＼、中々入っているな」

「はっ、はい」

「まあ、これならいいか」

「そ、それではこちらの方に署名をしてください」

「はいはいっ」と

役所の受付の一角は戦々恐々とした雰囲気広がっている。そして一緒に居る虎侍にもその視線が突き刺さり少し居心地が悪い。

「これでいいか？」

「はい。ご協力ありがとうございました」

雷聖は役人の言葉を殆ど聞かずにさつさと虎侍と共に役所を出て行く。

もうちょっと聞いてやろうよ……役所の人も大変だな。

少し担当をしている役人に同情してしまう虎侍だった。礼金の半分を虎侍に渡し雷聖は

「じゃ、服を繕いに行くか」

お、ラッキー袴繕ってもらおうと。つてか１０００銭が３枚つて３
 ０万…一回で３０万とか…ええええええええええ！！？！！多っ
 つ！！１５の俺が３０万を所持して一体何したと思われるんだよ！
 !確かにものつつつ凄く大変だったけど…ちよ、ちよつと手が震え

そう…じゃあ、元の世界じゃ何が買える？えーつとゲームが1個大体6千だとして…50個？…実感が沸かねえええええええ！！50個もゲーム変えるか！！全クリにどんだけ時間かかるんだよ！！

虎侍が相変わらず表情は動いていないので全く雷聖には分からなかったが混乱しながら歩いていると町を少し歩いたところに呉服屋があった。

そこそこ繁盛しており、訪問着のような少しカラフルな色から普段着のような少し落ち着いた色などの布がたくさんあった。

既製品のように既に出来合っている服も置いてあり、普通の町人は既製品を買って丈を合わせて再度繕ってもらっているようだ。

雷聖と虎侍は既製品の場所で今まで着ていた服と似たような服を買い。丈を合わせてもらい夕方に取りに来てくださいと言われ近くの茶屋で時間を潰すことにした。

こういうのってどこの世界でも似てるんだな。呉服屋で繕い物をしてた人すごいなミシン並の速さで繕ってたよ。まあ旋術少し使ってたからだけど。

旋術って意外と違和感なくこの世界に溶け込んでるんだな。意外と向こうの世界の電気製品みたなものかな。

虎侍が考え事をしているとお茶と団子が運ばれてきた。蓬のような団子とゴマ団子と餡子のようなものが付いた団子が3本と羊羹が2切れとセットで付いてきた。

よく見ると団子は一つ一つの大きさが不揃いで手作り感が滲み出ている。

食べてみるとほのかな甘さがほわ〜という効果音が付いてくるように広がり幸せな気分になる。元の世界のように綺麗というものではないけど温かさが伝わってくるおいしさだった。

食に関してはこの世界に来てよかったかな。元の世界じゃあ昔ながらの伝統とか言って値段が高いし。

日が暮れ始めたとき呉服屋に行ってみると縫い終わった服を渡してもらえた。ちなみに虎侍は長着1着と袴2着を買って90銭だったので100銭を一枚渡し10銭帰ってきた。ちなみに今の100銭はあの薬の代金の一部だ。

今の虎侍の懐には元の世界では札束で人をペシペシと叩くぐらいの大金が入っておりとてつもなく温かい状態だ。だが本人は初めて持つ大金に実感が全く湧いていないどころかその部分だけ思考が停止している。

そしてそのあとは平穩無事に宿に戻り明日からはしばらく布団の恋しい日が続くので早めに就寝し、存分と寝ることにした。

第十一話（後書き）

遅くなりました！

これからは週一回の更新を目指していきます。

第十二話（前書き）

残酷？表現入ってます。

第十二話

虎侍 side . . .

ダルダストを旅立って9日目ようやく雷聖が言っていた組に入る仲間が居る町、ネハツリームが見えてきた。町は緩やかな盆地になっており町の風景がよく見える。

「あと少しだな。多分この町に居るはずなんだけどな…」

雷聖がそう言いながら高台から下っていく。

ええ〜ここまで来てハズレは止めてくれよ…

畑は蒔いた種が新芽をだし所々で青々とした小さな葉が出てきている。町人たちは出すぎた新芽を摘んだり、害虫の駆除に忙しいようだ。そんな風景を見ながら虎侍と雷聖は町に向かっていく。

町の門まであと50メートルもないところで門の左の方の高台に居た町人が旋術を使って走ってきた。

「魔物だー！！！！逃げろー！！！！」

走ってきた人の後ろには背中に2本の爪を生やした亀が居た。体長は5メートルほどあるが走ってきた人を追い越す勢いで走ってきている。

亀なのに早ええええ！！！！足バタバタさせてるのにどこからあのスピードが出てるんだよ！！！！

「虎侍！助けるぞ！！」

雷聖は走り出す。走ってきた人と亀の差はあと5メートルを切っている。雷聖の速さでは追いつけない虎侍も旋術を全開で使い走る。刹那、雷聖を抜かし50メートルあった距離を一気に詰める。亀の背中にあった爪が振りかぶられる瞬間、虎侍は亀と走っていた人との間に立っていた。そして低い体勢から抜刀し右斜め上に振り切る。

——戦源流剣術・笹斬り

虎侍の刀は鋭く亀の頭を絶った。頭が切り落とされた亀は爪を振り上げたままの状態でドスンと音を立てて崩れ落ちる。返り血が大量に出て虎侍の新しい服を汚してく。

ああーまた服が駄目になるー早く洗わないと。

虎侍は安堵して向かってくる雷聖が手を上げてくる。虎侍もそれに答えて少し手を上げるといつの間にか集まっていた町人たちが歓声を上げる。

ぎゃー！いつの間にこんなに集まったんだよー！！！！た、助けて
ー！！！！

虎侍が心の中で吃驚していると走っていた人が虎侍の腕にしがみつき感謝の言葉を何度も言う。

ちよー！！腕痛い！痛い！！

しがみつかれた腕がギリギリと万力のような強さで握られ悶絶している虎侍を知らず町人たちは虎侍に感謝の言葉をドンドン言っている。
く。

も、もう…いいから…はなして…

虎侍は虫の息になっている。

「虎侍！！！」

へ？！！

雷聖の声を聞き視界に映る魔物の爪を脊髓反射で町人を庇いながら刀を振る。

パアアアアン！！

「っ！！！！！」

出来る限りの速さで刀を振りぬくが気付くのが遅く、振った角度が甘かった刀は派手な音を立てて刀身の半ばから折れ、町人を庇い身動きが出来なかった虎侍の右の鎖骨の下から左首の方まで一筋の傷を残して動かなくなった。

駆け付けてきた雷聖が安全のために背に生えている2本の爪を一撃で押し折る。

「虎侍！！！！大丈夫か！！？」

意外と出血の量が多く雷聖は慌てる。虎侍は町人がくれた手拭いで止血するが手拭いは直ぐに赤に染まる。少し大きい血管を掠めたようだ。

痛ってーーーー！！！！ちょーーーー出血多ーーーー！！俺、まだ死にたくねえー
ーーーー！！！！

虎侍の表情は動いていないが心の中では大混乱している。町人は虎侍の落ち着き様を見て混乱が直ぐに収まり1人の中年男性が急いで診療所へ案内してくれることになった。

診療所に着くと誰かが先に知らせてあった様で直ぐに診てもらえた。

「意外と深いですね。縫いましょうかね」

……え？…縫うの？ちょ！ちょ！…ちょ！…ストップ！…嫌だ！痛いのは嫌だ！…！今も痛いけど縫うのはあああああ！…！

虎侍の背筋は冷や汗がダラダラ出ている。だが雷聖がさっさと虎侍の服を引つ張り歌舞伎役者のように長着の上だけをはだけさせ、何気に嫌がつている虎侍を強引に手術台に寝かせた。

医者の方もその間に針と糸を出し消毒液を持って手術台の近くにある台へ移動させ、ガーゼのような布を出してくる。

まつ！待つて！…！話せば分かる！…！こんな傷1日で直せるから…！…！…！

出血のためか緊張のためか虎侍の意識はそこで途切れた。

「お、起きたか」

目が覚めると雷聖が気付き声をかけてくる。目をパチパチさせている虎侍を見て雷聖は医者と呼びに行く。

えーっと、俺どうなったんだっけ？

少し視線を横にずらすと点滴が虎侍の腕に繋がっており違和感がある首筋辺りに点滴が無いほうの手で触つてみると包帯の感触が分かる。痛みは今のところ無い。麻酔のようなものが打たれているのか頭が、ぼーっと靄がかかったようにうまく動かない。

ぼーっと現状を把握しようとしている虎侍のところに雷聖と医者が来る。

医者は、気分は悪くないか等を虎侍に聞き異常が無いのを確認し、点滴の量を見て

「今夜はここで泊まりなさい。朝には薬を渡すので過激な動きをしなければ大丈夫だから」

医者はそう言つて去つて行つた。雷聖はそれを見送つてからゴソゴソと何かを出した。

「ほら、食べ。お前が助けた人がお礼に
て届けてくれたんだ」

えー。誰だっけ？

まだ頭がハッキリしていない虎侍は雷聖が渡してくれた何かの葉に包まれたものを開ける。中にはおにぎりが５つほど入っている。しかも丁寧に焼いてあり焼きおにぎりになっている。

おおおおー！！うまそー！！そういえば昼飯食ってなかったー！！！！！！

一氣に意識が覚醒しテンションがあがる虎侍。おにぎりに齧り付きうまそうに食べていく。雷聖は笑いながら茶を差し出してくる。五分もしないうちに食べつくし。満腹になった虎侍は眠気に襲われ

る。

あーなんか貧血っぽい。体ダルいゝ眠いゝ。

虎侍はあつという間にまた夢の世界へ行く。

翌日雷聖が

「すまん！連れになるやつが少し前に隣の町のほうに行ったらいいんだ。怪我してるのに悪い！」

雷聖は頭を下げて言う。虎侍は慌てて

「大丈夫……痛くないし……」

医者の処置がよかったようで少し違和感が残るものの痛くない虎侍は隣の町までなら今からでも十分歩ける状態だった。朝から傷薬と痛み止めと化膿止めの薬を貰い、今は町の宿を取ってゆっくりしているところだ。そして今日はゆっくりして明日に隣の町に行くことになった。

昼近くになりトントンと戸を叩く音がして

「よろしいでしょうか？」

雷聖が短くそれに答え宿の女将が戸を開け入ってくる。入り口辺りで座り。布に包まれた30センチぐらいの長細い物を差し出す。

「先ほど畑に落ちていたと持ってこられて恐らくこちらの方達だと申されました」

雷聖が近づき布を広げると刀の折れた方の刀身が現れる。

「虎侍これか？」

何度も見たことがある刃紋を見て脇に置いてあつた半分折れ軽くなつた刀を近くに持つて行く。折れた刀を鞘から抜き断面を合わせる。少し破片が欠けているところがあるが虎侍の刀だ。

「ありがとう。魔物の死体の近くに落ちていたのか？」

「どうでしょう。そこまで詳しく聞いてないものですから」

申し訳なさそうに言う女将。

「ああ、別にいい」

「それでは失礼します」

女将は静かに去っていく。

ああ、俺の刀があられもない姿に…じいちゃんに見られたら…ひい
いいいいい……

虎侍の心は恐怖凍りつきそうだ。

「…刀…元に戻せない…？」

虎侍は必死になり元に戻そうと手段を考える。

「んゝそうだな。隣の町に鍛冶屋が在ったはずだから明日町に行ったら行くか？」

虎侍はコクリと頷く。布に巻いて持つておくのは危ないので刃先を鞘に入れたあと柄のほうを入れ下緒で抜けないように括る。

はあ、刀が使えないと何か心許ない……ってか元の世界に戻ったらじいちゃんにどう説明しよう……いざとなったら似たようなものを作ってもらおうかな……

その後は特に用事もなく平穩に過ぎていった。そして翌日の朝に虎侍と雷聖は隣のヨナジャグという町に旅立った。

第十二話（後書き）

GWに3話ほどアップしようかと奮闘しています。

第十三話（前書き）

新キャラ登場です。

第十三話

雷聖 side . . .

あゝあ、本当ならネハツリームで大丈夫だったのになゝなんでヨナジャグなんかに行かなきゃいけないんだよゝ

雷聖はネハツリームで一回気を抜いたので気分がうまく乗らない。体全体で未練タラタラを表現しているようだ。もう一時間もしないうちにヨナジャグに着くがより遠く感じてしまつて歩幅もいつもより小さくなつてきている。

雷聖が虎侍の方を見てみると最近見慣れてきた無表情があるが壊れた刀を抱き抱えて雷聖の後ろを着いてくる。雷聖はカルガモの親鳥になった気分ですり軽くなった足取りで進んでいく。

「虎侍、あれがヨナジャグだ。今度こそあそこに居るぞ。多分…」

多分って自分で言つてて説得力ねえー！あ、そういえば虎侍の刀も直させないとなゝ俺、刀のことなんて全く分からねえし鍛冶屋に虎侍を置いていつてそれから人探しと洒落込むか。

簡単な計画を立てて少し見えかけた町に意気揚々と進む。

キーン！キーン！

金属を叩く甲高い音が耳に響く。

ズシャーッ！

雷聖の倒れる音と金髪女性の着地する音ここまで約1秒。

「お前！何しやがる！！！」

雷聖は起き上がりながら抗議する。だが金髪女性は雷聖の顔の近くまで近づき指を差しながら

「な〜に〜がつ！何しやがるよ！！それはこっちの言葉よ！あたしをほって勝手に2ヶ月もほつき歩いて！！おかげであたしは1ヶ月！ネハツリームで待ちぼうけよっ！！！！ヨナジャグでももう2週間経ってるし！！！！このバカ雷聖っ！！！！！」

一息で言い返す金髪女性。

「それはお前が実家に帰るって言うからだろう！！！」

「実家に帰ったのだって行きと帰り合わせても1週間と少しよ！」

「なっ！！お前は実家に帰るとしか言ってねえーだろ！！！！！」

「なんですってー！！！！！」

「あんだよ！！！！！」

お互いの視線が火花を散らす。

「ちょっと瑠奈さん！何してるんですか！町の人達が怖がってるじゃないですか！！！」

笠を被った少女が雷聖と金髪女性との間に割って入る。

「雷聖が悪いっ！」

「いや、瑠奈が悪いっ！！」

お互いが子供じみたことを言う。

「だって皐月！あのとてつもなく暇だった時間を思い出してよ！！暇すぎて宿の窓から過ぎていく雲の数を数えていた日を！！やるこゝとが無くて畳の目を数えた日を！！！」

笠を被った少女改め皐月は口に手を当てて考え

「確かにちよつと……」

瑠奈は少女の言葉を聞き雷聖に向き直る。

「ほらね！！聞いたでしょ！あたしたちは暇だったの！！それはもうすつつつごくっ！！！」

「いや、暇だからって何してるんだよ……」

雷聖は脱力しながら言う。

本当にこいつ大丈夫かよ……虎侍がうまく馴染めるか心配になってきた……というか皐月って誰だ？

「で、その後ろの娘は誰だ？」

瑠奈は一度皐月の方に振り返り。

「ああ、紹介まだだった。この娘は早乙女さおとめさつき 皐月。あたし達と一緒に旅をすることになるからよろしく！」

「はっ?! 早乙女って早乙女流武術の家のことか!!!!!!?」

雷聖は瑠奈の言葉を聞いて瑠奈の肩を掴んで聞いただす。

「ちょ!!! 痛っ! 痛いつてば!!!!」

「あ、悪い。ところで早乙女って…」

瑠奈の肩から慌てて手を離すが質問を止めない雷聖。

「そうです。私の家は早乙女流武術を教える道場をしています」

瑠奈の代わりに皐月が答える。

「なら何故こんな場所で…しかも一緒に旅だなんて…」

早乙女流武術は代々王帝に仕えている門外不出の武術。例え弟子として入った者すら武人として自由な旅に出ることを許されない流派のはず。もしこの子が本当に早乙女流武術の家の娘だとしたら何故こんなところに…この娘が嘘をついているか訳有りか…

雷聖はさつきと打って変わって冷静に推理していく。

「その…お父様と少し…あの、迷惑はかけませんから一緒に旅をさ

せてください」

皐月は頭を下げる。雷聖は悩む。

家出娘か…これなら話は繋がるが門外不出とまで言われた流派だろ…追ってくるやつがいてもおかしくないな。全く虎侍といいこの娘といいなんでこうも問題がついてるのか…お被いでもしてもらうかな。

雷聖は元々の厳つい顔の目頭に集まる皺を伸ばす

「別に一緒に旅をするのはいい。だが追ってくるやつの中に危ないのがいたら教えること、決心がついたら親のところへ一度帰ることが条件だ」

これならいいだろう。我ながらいい考えた。

雷聖は心の中で拳を揚げて自分を褒めた。

「あ、そういえば俺のほうにも1人連れがいるんだ。橘 虎侍っていうんだ」

少し黙っていた瑠奈は目をパチクリさせる。

「え？あんたが連れてきたの？」

雷聖はちよつとムカツとしながら

「そつだ。悪いか？」

「へえゝ珍しいこともあるもんねえゝ」

瑠奈は心底珍しそうに雷聖を見てくる。

確かに今まで瑠奈以外連れなんていたことねえし頼まれても全部断ってきたからな。おかげで『孤高の赤獅子』なんて言われてきたし瑠奈が珍しがるもの領けるな。

雷聖は自分の今までを振り返り瑠奈が珍しがるのを納得してしまい少し凹んだ。

「まあそこそこ強いやつだから旅には支障ないぞ」

「へえゝあんたが惚れるぐらい強いんだゝ楽しみゝどんな大男かしら」

瑠奈は虎侍に過大な期待をし始めた。

「いやガキだ。多分14、5ぐらいどちらかといえばひよろいぞ」

雷聖は虎侍の容姿を何となく伝えるが黒髪黒目、無表情、無口ぐらいしか思いつかず黙ってしまう。

「他に情報無いのゝ？つてゆうか前に言ってた雷聖の強い基準ってガツチリしてて30代前半あたりって言ってたじゃない真反対よ？」

「それでも強かったんだよ。悪いか？」

「べっつにゝ」

確かにあいつは強いそれは保障できるな。あとなんか情報はあったか？んんん…おっ！！

「あとは記憶喪失だ！」

よし、これであいつの情報は伝わっただろ。ん？

雷聖はやり遂げた顔をして瑠奈を見ると啞然とした表情を浮かべている。

虎侍と違って表情がコロコロ変わるな………あっ！記憶喪失は不安要素じゃねえか…

「あんだなんて危ない状態の子を連れてるのよ！！元のところに返してきなさいよ！！」

そんな動物を拾った子供みたいに…というか元のところ分からねえみたいだから一緒に来てるんだよね…説明するのめんどくせえな…

「まあ本人が何も文句を言わねえからいいんじゃない？」

雷聖は無責任なことを言ってみる。

「記憶が無くて分からないから文句を言わないんじゃないの？」

「……それもそうかも」

はあ…とため息を零す瑠奈。

「で、その虎君はどこ？」

虎君…まだ会ってもいねえぞ…

「刀が折れたんで鍛冶屋に置いてきた」

「はあ！？あんたバカ？何にも分からない子を普通置いてくる？！
！」

瑠奈は呆れと怒気をひつくるめた顔をして雷聖に詰め寄る。

「それもそうかも。まあ大丈夫だろ喧嘩吹っかけたりするようないつじゃないし」

むしろあいつが喧嘩吹っかけたところをみてみたいぐらいだし。

「バカッ！最近この町の不良が随分でしゃばって昼でも治安が悪くなってるのよ！」

「なっ！知るかよ！俺は今日着いたばかりだぞ。情報仕入れる暇なんてねえし！！」

「とにかく虎君のところまで行くわよ！！」

瑠奈はそういうと直ぐに鍛冶屋がある方向へ走っていく。臯月遅れながらも着いていく。

あゝこんなことなら先に瑠奈を見つけてから鍛冶屋に連れて行けばよかった…ってか治安が悪くてもそんな簡単に絡まれるわけねえだろ…

雷聖も渋々着いていく。

第十三話（後書き）

そろそろ人物紹介を作ろうかと思っているが挿絵の付け方がよく分からん……説明読まないタイプなんで……もう暫くお待ちを……

あとPV2万8千、ユニーク5千を突破しました。日々のご愛読に感謝しますm - - m

第十四話

溜奈 side . . .

「今日は何をしようかなあゝ皋月は何がしたいゝ？」

「私は特にしたいこと無いよ」

はあ、この2週間ずっと同じようなこと言ってるな、最初はこの町に新しい呉服屋が出来たから来たのに3日で飽きちゃったし……でもネハツリームで1ヶ月の方が辛かったかも……何にも発展がないのにお金だけが減っていく日々……まだお金に余裕があったからよかったけど下手すれば宿無しになるところだったし……あー！！！！思ってるだけで嫌になってくるうううううう！！！！早く帰ってこー！！！！雷聖のバカー！！！！！！

少し溜まったものを発散させ幾分気分がよくなる。

「じゃあ、今日は木目の観察でもしようか……」

「うん」

気分がよくなつてもすることも無く無駄な出費は抑えたいため部屋で過ごすことになる。

しばらく部屋中の木目を見ているとトントんと部屋の戸を叩く音がする。

「どうぞ」

返事をして戸を叩いた主に入室を促す。

「深那月さん。赤い毛、強面の旦那を見つけました確認はしてませんが多分その人かと」

この町に来て直ぐに頼んだ情報屋に雷聖はい人を見かけたら直ぐに知らせるように頼んでおいたのでその知らせに来てくれたのだろう。ネハツリームでも同じように伝言を頼んでおいた。お金はかかるが大きい町を毎日回るのも嫌なのでこの手の商売は大きい町ほど多い。

「そう！ありがとうございます！臯月行くよ！！さつさとあいつに蹴りを入れないと気がすまないわ！！」

町の中で危険は殆ど無いので雷聖に最高の蹴りをするためにお気に入りの薙刀は置いていく。臯月もかさばる弓は置いていき剣だけを腰に差して準備は出来ている。情報屋もそれを見て案内のために先に行き、瑠奈と臯月は後に続く。

「あの人ですよね？」

「ええ、そうよ。ありがとうございます。これ報酬の分ね」

「毎度ありがとうございます。またご利用ください」

情報屋はそれではと言って去っていった。今、瑠奈と臯月は雷聖の背後にある家の角で身を隠している。雷聖の周りには人はいないこ

とを確認して周りに被害が無いようにする。

くふふつ。さあゝて雷聖のどてつ腹に一撃入れてやるゝ

そして瑠奈は勢いをつけて走り出す。

「いらいせいらいらいらいらいらいらいらい！」

雷聖が振り向く動作を見て直ぐに勢いをつけたまま飛び上がり両足を揃える。そして両足に感触が広がる。

「ゲフツツツ!!!」

ああ！いい感触っ！！！！でもこのまま着地するとあたしが危ないわねっとな！！

雷聖の腹を台にして着地地点をずらす。

「ブフェツ！！」

ドサッ！

ズシャーッ！

スッキリしたー！！！！！！とりあえずヨナジャグでの2週間分の鬱憤は無くなったわね

「お前！何しやる！！！」

ムカツ！ やっぱり2週間分は重いわね！

「な〜に〜がつ！何しやがるよ！！それはこっちの言葉よ！あたしをほって勝手に2ヶ月もほつき歩いて！！おかげであたしは1ヶ月！ネハツリームで待ちぼうけよっ！！！！ヨナジャグでももう2週間経ってるし！！！！このバカ雷聖っ！！！！！」

このあと皐月が言い合いを止めてなければ実力行使をする勢いだっただ2人だった。

そして皐月が雷聖に同行する許可を交渉し、雷聖は少し悩んで許可した。

あたしが大丈夫だって言ったのに律儀な子ねえ。

「あ、そういえば俺のほうにも1人連れがいるんだ。橘 虎侍っていうんだ」

いきなりの爆弾発言。

「え？あんたが連れてきたの？」

思わず聞き返してしまう。

「そうだ。悪いかな？」

悪いも何もねえ？

「へえ〜珍しいこともあるもんねえ〜」

天下の孤高の赤獅子がねえ〜虎侍なんてもの凄い強そうな名前だしすっごい期待しちゃうな〜

「まあそこそこ強いやつだから旅には支障ないぞ」

「へえゝあんたが惚れるぐらい強いんだゝ楽しみゝどんな大男かしら」

きつとムキムキで化け物じみた大きな剣を使うんだろうなゝ

「いやガキだ。多分14、5ぐらいどちらかといえはひよろいぞ」

思わずこけそうになる瑠奈。

「他に情報無いのゝ？つてゆうか前に言ってた雷聖の強い基準ってガツチリしてて30代前半あたりつて言ってたじゃない真反対よ？」

「それでも強かったんだよ。悪いか？」

「べつつにゝ」

雷聖がそう言うなら強いみたいだけどちよつと心配…

「あとは記憶喪失だ！」

心配が的中！！！！

「あんたなんて危ない状態の子供を連れてるのよ！！元のところに戻してきなさいよ！！」

「まあ本人が何も文句を言わねえからいいんじゃない？」

なんでこんな無責任なことが言えるのよゝ

瑠奈はガツクリと肩を落とす

「記憶が無くて分からないから文句を言わないんじゃないの？」

「……それもそうかも」

はあくつとため息を零す瑠奈。

「で、その虎君はどこ？」

もうあたしの中じゃ迷子の虎君ね…

「刀が折れたんで鍛冶屋に置いてきた」

本日2度目の爆弾が炸裂。

「はあ！？あんたバカ？何にも分からない子を普通置いてくる？！
」

「それもそうかも。まあ大丈夫だろ喧嘩吹っかけたりするようなやつじゃないし」

迷子の虎君が吹っかけなくても駄目なのに！！！！あーもうこのバカ雷聖！！

「バカッ！最近この町の不良が随分でしゃばって昼でも治安が悪くなってるのよ！」

「なっ！知るかよ！俺は今日着いたばかりだぞ。情報仕入れる暇な

んてねえし!!」

少くぐらい町の様子を肌で感じなさいよ!!こんな昼間なのに町の人
の怯えが感じられないなんて!!訛ってるわ!むしろ腐ってるわ
!!

「とにかく虎君のところまで行くわよ!!」

あたしはとりあえず鍛冶屋のある方向に向けて駆け出す。

後ろから雷聖と皐月が追ってくることを感じながら瑠奈は何も無い
ことを祈りながら走る。

十数分走り鍛冶屋の近くまで来る。鍛冶屋は火が多いせいで町の
中心から距離を置いて店を構えるため旋術を使っても意外と遠い。
あと住宅地の角を3回曲がると鍛冶屋が見えてくると瑠奈は思い角
を曲がると。4人の大男に囲まれている少年が居た。

「一言も喋らねえとはいいい度胸じゃねえかああ?!!」

まさに一触即発。

「げ…虎侍…」

追いついた雷聖が呟く。

あゝなんで予想通りに絡まれてるのよ

「ちっ!!やれ!!」

4人の大男たちが一斉に襲い掛かる。

「ちょ！！！！！」

瑠奈は止めようと駆け出すが大男たちの中心に居た虎侍の姿が一瞬にして消える。

虎侍は旋術を使い大男たちの中心から脱出していた。

「ぐあ！！！！このガキ！！！！」

大男たちは互いにぶつかり合い振り向いて虎侍を睨む。

「死ね！！！！」

直ぐに虎侍に殴りかかった大男の1人は虎侍が殴りかかってきた勢いを利用して2、3メートル投げられ背中を打ちつけ悶絶する。次に2人同時に殴りかかる。

「おらあ！！！！」

「でえやあ！！！！」

虎侍は今度も勢いを利用して2人の首に腕を引っ掛け後ろ向きに倒す。2人は白目を向いて気絶する。

「こいつ！！！！」

最後の1人は2人を倒した虎侍が無防備になった瞬間を狙って腰に差してある剣を振り下ろす。だがそこに虎侍は居ない。

「なっ！！どこに！！」

男が驚き周りを見回すそのとき虎侍は振り下ろした男の腕の下に移動して無防備な男の顎に手掌を放つ。男は2人の男と同様白目を向き倒れる。

虎侍は全くの無傷で4人の大男を圧倒した。最初に背中を殴打した男は悲鳴をあげて他の3人を置いて逃げていった。

へえゝ強いわね…

瑠奈は駆け出そうとして虎侍の強さを感じ傍観に回っていた。

旋術であれだけの速さで戦うやつはあまり居ないわね。ああいう速さに重点を置いてる子はどこかで自分の速さが怖くなって無意識のうちに抑制されてるものだし、あの速さで相手に突っ込む度胸なんて自分も巻き込まれる可能性だってあるはずなのに…本物かバカか…いくら記憶喪失でも見極めどこが肝心ね。

「虎侍！！大丈夫か？！」

雷聖の言葉を聞いた虎侍が瑠奈たちの方を向くと首あたりに見えていた包帯に血が滲んでいた。

「あゝ、結構派手に動いたから傷が開いちまったか。医者に行くか」

虎侍はコクリと頷く。瑠奈がじいゝと虎侍を見ていることに雷聖が気が付き。

「虎侍、この2人が一緒に旅をする深那月^{みなつきるな} 瑠奈と早乙女^{さおとめさつき} 皐月だ。

瑠奈、皐月こいつがさっき言ってた虎侍だ」

「…よろしく…」

さっきの大男4人を圧倒した同一人物だとは思えない覇気の無い声にこけそうになる瑠奈。

ええ?!これがさっきの子?!あゝこの無口、無表情はあたしちよつと苦手かも…どう話しかければいいのよ…!!

「で。虎侍、刀の方は大丈夫だったのか？」

虎侍は首を横に振り

「新しく…仕立ててもらおう…」

「そうか、どのくらいかかるんだ？」

「…5日」

雷聖はそうかそうかと言い町の中心にある診療所へ歩いていく。

ああするの…でもあたしには少し無理があるかも…皐月だけならなんとかなると思ったけど虎君みたいな性格の子の方があたしには大変かも…

瑠奈はあーとため息を吐きながら皐月と一緒に雷聖と虎侍のあとに着いていく。

第十四話（後書き）

個性がうまく作れない……明日も1話アップする予定です。

第十五話（前書き）

専門用語です。

第十五話

虎侍 side . . .

はあゝ鍛冶屋に1人で置いていかれても…大丈夫かな俺…

とりあえず鍛冶屋の門を潜り店に入る。

店に入ると40代ぐらいのおっさんと70代ぐらいのじいさんが居た。

「いらっしやい!!どうしたんだ坊主お使いか?」

「俺の刀…直してもらいたくて…」

虎侍がそう言うとおっさんの方が手を出して貸してみろと言ったのでその手に折れた刀を置く。

「ほう、これはまた随分とやったもんだな」

何故か感心しながら呟くおっさん。

「カッカッカ!坊主何をやってこつなつた?」

じいさんが笑いながら尋ねてくる。

えゝつと何だつけあのデカイ亀?…確か大鎌亀だったような…

「大鎌亀を倒したときに…」

「ほおゝそれで甲羅の部分を叩いたのか？」

じいさんが訝しげに虎侍を見てくる。虎侍は首を振り

「鎌の部分…」

じいさんはほおゝと面白そうに笑う。

「おいおい坊主、大鎌亀の鎌は甲羅の次に硬いつてのは知ってるのか？」

おっさんが呆れたように言う。

へえゝ初めて知ったなゝ硬そうとは思ってたけど甲羅の次に硬いのか勉強になったなゝ

虎侍が感心するように聞いているのを見ておっさんがため息を吐く。

「カツカツカ！まあこれだけで坊主が助かったのならいいことじゃねえか」

じいさんがいいことを言い虎侍は内心ほっとしている。

おっさんはそれもそうだなと言いつつ近くにあった金槌を引っ張ってきて刀を叩く。

キーン

おっさんが金槌を叩く手を止め、じいさんは驚いたように眼を見開き刀を見る。

虎侍は困惑する。

お前さん？さっきまで坊主って言うてたのに？この刀は誕生日プレゼントとしてじいちゃんからもらったものだけど……師匠からもらったって言ったほうがいいのか？

「お前さんの師匠は随分とお前さんを死なせたかったらしいな」

「軟鉄だけとしちゃあ一級品だが、礎永鉄を使つてない武器なんてただの重い練習用の鉄にしかならねえぞ。よくこんナマクラ刀で大鎌亀と遣り合えたな。これで他にも何か斬つたか？」

「トコ蜘蛛1体と火吹き狐海豚30体と大鎌亀1体……」

117

「お前さんよく死ななかつたな…」

じいさんが驚き過ぎて声が震えている。おっさんの方は驚きすぎて声も出ない様子。

確かに狐のときは死ぬかと思ったけどね…今思い出すと背筋に冷や汗が出るし。

「そうか、随分とこの刀で修羅場を潜ってきたようだ。御見逸れいた」

じいさんが何故か頭を下げる。

こ…これはどう反応すればいいんだ？

虎侍は表情に出てないが焦る。

そしてじいさんが頭を上げると

「この店で一番の刀を仕立ててやろう所持金は幾らある？」

おお、切り替え早っ！！慌てて損した気分になりそう…ってか一番の刀って高くなりそう…俺そんなに持ってないぞ

「3000…銭と少し…」

じいさんはほうほうと頷き

「随分と持ってるんだな」

おっさんの視線が何故か突き刺さる。じいさんがやめねえかと言っておっさんの頭を叩いている。

まあこんなガキが持つには過ぎた金だからな。そういえばこの世界の平均収入って幾らぐらいだろ……

虎侍が疑問に思っている

「よし、1500 銭でいいぞ」

15 万か…元の世界と比べると安いな。

虎侍はコクリと頷く。

「支払いは刀が出来てからだ」

虎侍はもう一度頷く。

じいさんが折れた刀を見ていて。

「ふむ、2 尺3 寸程か…お前さんぐらいだとあとあと1 寸長くしておいたほうがいいだろうな」

確かに最近身長がよく伸びてるからな。高校に入って直ぐにあつた身体測定で165 センチになってたし長く作ってもらったほうがいいな…

虎侍は頷く。おっさんは紙に筆で注文用紙みたいなものを書いていく。

「拘りとかあるか？」

「…特に無い…」

フムフムとじいさんは頷く。

「坊主は黒で統一してるみたいだがそっちのほうがいいのか？」

おっさんが紙から顔を上げて言う。

そっちのほうがいいっていうか選んできるといつい黒っぽい色にな
ってるんだよね。先生にもらった服は浅緑色のが、2着だったけど
両方駄目になったからダルダストで自分で選んだ服は全部黒とか黒
に近い色ばかりだな…。髪と目も黒だからそうとられても不思議
じゃないな。今度服買うときは違う色を買うか…

虎侍は首を横に振りながら少し凹んだ。

「だったら親父、柄巻をこの間買った若草色の糸でしようぜ」

「ふむいいな、だったら鞘も白鞘にするか？」

「いやいや、この黒にいい具合に色を混ぜるなら白鞘は止めといた
ほうがいいね。あえて乾漆の黒で柄巻の若草色を強調させるんだよ」

「おお！なるほど。なら縁頭も黒に近い色ですか模様はどうする
？」

「うーん、坊主名前はなんていうんだ？」

専門職の話についていけずぼーっとしているとおっさんから声をか

けられ慌てて答える虎侍。

「虎侍…」

虎侍の名前を聞くなりおっさんとじいさんがニヤツと笑う。

「虎の縁頭で決まりだな。鰐と目抜も虎でいいか？」

「いや、目抜はあえて龍がいい。波紋はどうしよう…互の目、直刃…乱れが一番いいな」

……………もうどうにでもして…

虎侍は自分ものになる刀のデザインをおっさんとじいさんに丸投げしてあとのことは殆ど聞き流していた。

「ふむ、久々に腕が鳴りそうだ」

さいですか…俺、自分の刀になるのにノータッチで終わったよ…

「5日後に来てくれれば完成してるからな。あと折れた刀は預かっていてやるよ。持っても邪魔だろ」

おっさんはニヤツとして虎侍を送り出した。

不安だ…まあいい刀を打ってくれそうだからいいや

鍛冶屋を出て町の中心を目指して歩き出す虎侍だった。

「おいこらガキ。俺に当たっておいて謝りもしねえとはいいい度胸じやねえか？ああ！？」

どの世界でも当たり屋って出現するんだ…

鍛冶屋を出て10分もしないうちに柄の悪い大男4人のうちの1人が当たりそうになって避けた虎侍に態と当たりに来た。

あーどうしよう……刀があれば峰打ちで直ぐにいけるけど…無いものねだってもなぐじいちゃんに体術習ったことあつたけど苦手だな

「一言も喋らねえとはいいい度胸じやねえかああ？！」

ここまでくるとタダで逃がしてくれそうにないな…はあ、がんばろ

……

第十五話（後書き）

なんとかGW中に3話更新できましたが次の更新は来週の金曜日あたりになります。ご了承ください。よろしくお願いします。

第十六話

皐月side...

すごいな…怪我してるのに簡単に4人も倒しちゃった…体捌きも洗練されてる。雷聖さんも噂と雰囲気強いことは知ってたけど虎侍さんも私と同じぐらいの歳なのに…強い。

「皐月…どうしたの？」

瑠奈が何故かニヤニヤと嫌な笑みを浮かべながら皐月に近づく。

「虎侍さん強いなと思って…」

「へえ…」

瑠奈の笑みは深くなる。

「ど、どうかしたの？」

「ん…ちょっとね…」

おどけてみせる瑠奈。皐月はムッとして

「何かあったのなら教えてよ！」

瑠奈は面白そうに笑う。

「じゃあ、教えてあげる。皐月ね虎君のこと言っただきとっても女

の子の顔してたから」

女の子の顔…？

「それってどういうこと？」

「ずばり皐月は虎君に恋をしてるってこと」

瑠奈はそついうと愉快そうに笑う。

え？え？！！私、虎侍さんのこと…その…す…好きなの？

皐月はそう思うといきなり顔が熱を出したときのように熱くなった。

「皐月、顔真っ赤よ」

瑠奈が茶化してくる。

「も、もう！よしてよー！！」

瑠奈は笑って診療所から出てきた雷聖のところへ行ってしまう。雷聖のあとに続いて出てきた虎侍の顔を見た瞬間皐月の顔はさらに熱くなる。

うゝ瑠奈のせいで治らないじゃない……

追っ手を撒くために被っている笠を深く被りなおして顔を隠し瑠奈の後を追う。

「どうだったの？」

「ああ、少し傷が開いただけだって」

「そう、大したこと無くてよかったじゃない」

診療所の前で立ち話をするのはあまりいいことではないので臯月と瑠奈が泊まっていた宿に行くことになった。その間臯月は一言も喋らず顔の火照りを冷ますのに忙しかった。

「で、お袋さんと親父さんはどうだったんだ？」

「いつも通りだったわよ。元気に畑を耕してたから1泊して直ぐにまた戻ってきたのよ」

少し怒気を含んで瑠奈は雷聖に言う。

「悪かったって。ちよつと久々に一人旅をしようと思ったただけだから」

「ふうん」

さつきから同じ内容を繰り返している。臯月は笠をはずして虎侍をチラッと見てはサッと顔を逸らしてを繰り返している。虎侍は新しく巻かれた包帯が気持ち悪いのか包帯をずらしたりしている。

「おいおい、虎侍あんまり弄つてるとまた傷が開くぞ」

雷聖に言われて手を退けるが暫くするとまた包帯に手を伸ばす。

ちょっと可愛いかも…

皐月は不謹慎なことを思ってしまう。

「うーん…あ、そういえば手拭いがあつたわねこれでも付けときなさい。皐月、付けてあげて」

意味ありげに皐月に指名する瑠奈。

もう、瑠奈ってば…

皐月はそう思いながらも瑠奈から手拭いを受け取り、虎侍の後ろに回り手拭いを広げる。緑色の手拭いを傷を傷めないようにそつと結ぶ。

「きつくない？」

虎侍はコクリと頷く。

は、恥ずかしい…

皐月はまた顔が火照りそうになる。

「……ありがとう……」

顔が思わず綻ぶ。

後ろに回っててよかったー！

ふと見ると瑠奈が雷聖に何か耳打ちしている。瑠奈から何かの情報を得た雷聖は悪巧みしそうな顔でニヤリと笑う。瑠奈もまた似たような顔で笑う。

い、一体何が始まるの……？

「臯月、虎君、あたし達ちょっと今後のことで話があるからお酒の飲めるお店でお話してくるねえ」

お酒の飲めるお店は年齢規制が厳しく18歳以下は入ることすら妨げられる。罰金等はないが18歳以下がお酒を飲むと成長の妨げになると王帝が言ったためお酒の出すお店では自然と18歳以下にはお酒を出さない。

ちなみに臯月は1週間前に誕生日がきて17歳。虎侍は15歳。瑠奈は19歳。雷聖は20歳となっている。

「夕飯はこれでどっかいいい店で食え」

雷聖は100銭を3枚臯月に差し出す。臯月が受け取ると雷聖と瑠奈は腕を絡めて意気揚々と部屋を出て行った。出て行くとき瑠奈は臯月に口パクで頑張れと伝えてきた。

ちよつとー！瑠奈ー！何が頑張れなのー？！駄目ー！私の心臓がどうにかなっちゃうからー！！

臯月の心の訴えも空しく部屋の戸がパタンと閉められる。10分ぐらい臯月と虎侍は殆ど身動きもせず固まっていた。夜の帳が下りてくる。

「あの…そろそろどこかの飲食店に行かないと席が無くなるから…」

その…行こう?」

10分間の皐月の勇気が結集し虎侍に一声かける。虎侍はコクリと頷く。直ぐに部屋を出て皐月は近くにある飲食店に虎侍を案内する。

うゝ緊張するゝ…でもちよつと虎侍さんと2人きりって思つて嬉しいと思つて自分が居るよゝ瑠奈ゝ私、どうしたらいいのゝ?

店に入ると直ぐに席に案内される。この店はヨナジャグの中では一番の料理の多さで結構な賑わいをしている。

皐月と虎侍は定食をそれぞれ頼み。料理を黙々と食べる。

うう…気まずい…でも食べてるときに話しかけるのって無理…それにいつも瑠奈から話しかけてくれたから私から何か話すのって…無理ー!…うう…食事中でよかった…顔赤くなつてるが分かつちやう…

皐月は料理そつちのけで考え事をしていたので料理の味は覚えていない。

「毎度ありがとうございますー!」

店の店員が愛想よく皐月を送り出す。虎侍は厠に行ったので皐月は先に店を出て虎侍を待つことにした。夜風がまだ火照つた顔の熱を取り去ってくれる。

「まだ…かな?…」

虎侍が来るのが待ち遠しく、肌寒くなつてきた風に身を震わせる皐

月。

まだ今日会ったばかりなのに……少し離れているだけで寂しい……

暗い気持ちを変えようと深呼吸をする。暫くすると1人の男が近づいてきた。

「へえ〜こんな可愛い子が1人で何してるの〜」

肌に纏わり付くような声で皐月に話しかけてくる男は、昼間に虎侍に喧嘩を吹っかけてきた男たちの1人だった。

「ねえねえ、無視しないでよ〜いいこととしてあげるからさ〜」

皐月は関わる気が無く無視を続ける。

「まあいいや、そのうちに気持ちよくなるし〜」

「え?…きゃっ!〜!」

皐月は腕を引つ張られ悲鳴を上げる。

「おっ可愛いね〜益々いい感じ〜」

「くっ!〜!」

皐月は腰に差した剣を抜こうとするが本来あるべき剣が無い。

嘘っ!〜!剣が…無い……!〜!

皐月は唇を噛み浮かれ過ぎていた自分を責める。

「あれゝ？武人さんだったんだゝ怖いねえゝ大丈夫だよゝ」

皐月の腕を引っ張り昼間にしか開いてない店の人気の無い方へ連れて行く。

「止めてくださいっ！！」

旋術を使い抵抗するが相手も旋術を使い皐月の力ではどんどん引きずられ、人通りが多い方から殆ど見えないところまで来ると店の壁に皐月を押さえつけた。抵抗していた反動で壁にぶつかり息が詰まる。男は着物の間から手を入れようとする。

虎侍さん助けてっ！！！！

目を瞑り虎侍に心の中で助けを求める。

ガッツ！！

「ぐあっ！！！！」

え？…虎侍さん…？

突然男が吹っ飛び啞然として男が吹っ飛んだ反対側を見ると虎侍が立っている。

怒ってる？

会ったときから無表情だった虎侍の顔に少しだけ怒った顔を見た皐

月は、迷惑をかけたため謝ろうと思い俯きかけた顔を上げる。

「うう…このガキが!!」

打ち所が悪かったのだろう立ち上がろうとするが蹲ってしまふ男。

「あの…虎侍さん…?」

手を取られ虎侍に引つ張られ抵抗することも無くその後を着いて行く。

夜風で冷えていた手にじんわりと虎侍の温かさが染み渡る。

あつたかい……

早足で宿に向かう臯月は虎侍の背中を見ながら手の暖かさを味わう。

第十六話（後書き）

スイマセン>（――）<

恋愛って何ですか？……行き詰まりそうです…

最近一日のユニーク数が100を超えています。日々のご愛読感謝しますサンキュウ（o, _ , ）ノ

第十七話

虎侍 side . . .

拝啓、じいちゃん…俺、今もの凄く青春してます。

新しく一緒に旅をすることになった深那月 瑠奈さんは金色の短髪、目は碧で結構強気な女性で雷聖と恋人っぽい。そして！早乙女 皐月さん銀色の肩を少し過ぎるぐらいの髪で目は薄い紫。はつきり言っでどストライクです！フルスイング come！！ってくらいストライク！！首に手拭いを巻いてくれたときも初めて無表情でよかつたと思っただくらい！心臓がブレイクダンス踊ってたよ！！でも俺ここでは異世界人なんだよな……例えば両想いになったとしても元の世界に戻ることにしたら俺、最悪じゃん……

虎侍は皐月に会ってからずっと同じことを思っていた。雷聖と瑠奈が酒を飲むとか言っでさっさとどこか行ってしまっで虎侍はどうしようか迷って何気に皐月が気になりながら何か話しかけることは無いかなど考え少し焦りかけたときに皐月が飲食店に誘ってくれたときは小躍りしそうなほど心の中で喜び、店に着いてからまた悩みを繰り返していた。

料理を食べた後、厠に行っているうちに皐月は外に出たようで虎侍も急いで外に出る。だが店の外には皐月らしき人は居ない。

もしかして…先に帰った？喋ったりとか全くしなかったから呆れられた？……暫く立ち直れそうに無いな…

虎侍がしょんぼりして宿屋に向けて歩きかけたとき皐月の声が微かに虎侍の耳に届く。振り向きもう一度よく見てみるが幻想的な銀の髪は無い。

あれ、居ないよな?? 疲れてる?

虎侍はため息を吐きながら歩みだす。

「——めて——ださ——っ!!」

「っ!!」

声が今度ははつきりと聞こえ、虎侍は声が聞こえた方向に向かい走る。臯月を見つけたのは店と店の人通りが全く無い場所だった。そこで昼間、虎侍に投げられ一人逃げて行った男だった。男は臯月の着物の間に手を入れ着物を肌蹴ようとしていた。それを見た瞬間虎侍の頭は爆発した。マグマのような熱いものが虎侍を支配する。虎侍は男に向かって拳を振るう。

ガッツ!!

「ぐあっ!!!!……うう……このガキが!!」

男が立ち上がろうとする中虎侍は臯月の手を強引に取り急いで移動する。臯月の声が聞こえるが無視をする。

クソっ!あの男次に居あったらシバく……!!!!

ギリッと奥歯をかみ締め宿がある方向に早い足取りで進む。

新しい刀の試し切りに使ってやる……

宿が見えてきても虎侍の怒りは収まらなかった。そして何も思わず

手を強く握る。

「痛っ……」

「う……ごめん……」

皐月が虎侍の握力に思わず声を上げ、虎侍はようやく皐月の存在を忘れていたことに気が付き即座に誤る。虎侍と皐月は見合い虎侍は皐月と目が合ったときに思わず目を逸らしてしまう。

俺何やってんだよ！！こんな時、怪我が無いかとか気の利いた言葉が直ぐに出てこないときに一番無口さを恨むよ……とりあえず何か声をかけたほうがいいよな……？

「あの……ごめんなさい……」

虎侍がいざ声をかけようと口を開きかけたときに皐月が虎侍よりも早く言葉を紡いだ。

え？……早乙女さんは何にも悪いことしてないよね？？寧ろ俺のほうが着物で走りにくいとか考えずに乱暴に手を引いてペースとかも無視して……絶対俺の方が悪いような？何に對しての謝罪なの？

虎侍が皐月の言葉を理解しようと考えている内に皐月は走っていき虎侍を追い越しあっという間に宿の中に入ってしまった。

「あ……」

虎侍の手は皐月を追うように少し上がり行く当のない手は宙を彷徨い、虎侍はその場で啞然として佇む。

嫌われた？…………俺何か嫌われることした？した…かも。じいちゃん…俺初恋初日でフラれたよ…………あ、初恋は幼稚園のミキちゃんだったかも…ノーカーウントだったとしても小学校の1つ上のヨシミちゃんにも俺淡い恋心持ってたかも…

確かに俺はこの世界の住人じゃないしあんな綺麗な人と両想いになれるなんて過度な期待とかしてないけど…片想いすら駄目なのか？叶わない夢でも思うだけならいいと思ったのに…………はははっ…

なあ神様あんたは俺をどうしたいんだ？

俺は元の世界で平穩に生きたかったんだよ？今までなんにも思ってたけど俺はこんなところに来たいか思ってたこと無かったし今までの人生で満足してたよ？今からでもいいから元の世界に帰してくれよ…

虎侍は今までのショックも重なりで小雨が降ってきててもその場で立ち尽くしていた。

「虎侍？」

どれくらい立ち尽くしていたのか分からないときに雷聖の声が後ろから聞こえてきた。振り向くと何故か不思議そうな顔をしている雷聖と酒のためか顔がほんのり赤みを帯びている瑠奈が傘の下で腕を組みながら居た。

俺どれだけここに居たんだ？

虎侍はぼーっとしながら雷聖を見ていると瑠奈が雷聖に耳打ちして

雷聖が頷き虎侍に近づく。

「虎侍さっさと温まって寝るぞ」

雷聖は虎侍の背を押して宿に足す。虎侍は抵抗せずに雷聖に連れられて宿の浴場に連れて行かれた。濡れた服を脱がされ浴槽へ押し込まれる。ぼーっと風呂に浸かり少しのぼせた頃に風呂から出る。更衣場で雷聖は座って待っていた。いつの間にか虎侍の服を持ってきていて虎侍はそれを着た。その後は皐月と瑠奈が居た部屋とは違う部屋に雷聖に案内され雷聖が淹れてくれたお茶を一杯飲み直ぐに就寝した。

何で俺はこの世界に居るんだろう…

第十七話（後書き）

前の話で書くのを忘れてましたが・・・
お酒は20歳から！！！！

久々に活動報告の方で愚痴りまゝす。

第十八話

雷聖 side . . .

虎侍と皐月つて子が甘い雰囲気を出しているのを背中が痒くなりそうな感じで俺は眺めていた。

あゝ何かなゝこう、ズバッと感じで終わらねえかなゝいや不幸なほうじゃなくて幸せな方向で。俺はこういう女々しいつかもジモジした感じはあんまり好きじゃねえんだよなゝ頼りないつかかなゝ

「ねえ雷聖あの2人いい感じだと思わない？」

確かにいい感じだろうなお前すっげえ楽しそうだし

「それでね、あの子たちくっ付けちゃわない？」

ほゝゝいいこと考えるね…

瑠奈の誘いに笑みが零れる雷聖だった。

「皐月ゝ、虎君ゝあたし達ちよつと今後のことで話があるからお酒の飲めるお店でお話してくるねゝ」

くっ付けるって言うつて方法はほったらかしかよ。まああの感じだとそれでもうまくいきそうだな。

雷聖は皐月に金を渡し瑠奈とさっさと宿を出る。

「帰って来たときが楽しみ〜」

「あんまり期待してると後から落胆するぞ?」

「そうね〜思ってたよりも進んでなかったら嫌ね〜」

「お前の中ではどこまで進む予定だ?」

「え〜っと、床まで?」

ゴツッ

「痛った〜!」

「まだ日も高いのに言うことじゃねえだろ!」

「何も拳骨することは無いでしょ!」

少しずつ回りの視線が集まってくる。

「分かったから早く飲み屋に行くぞ」

瑠奈も視線に気付く顔を少し赤らめながら雷聖の後について行く。

宿からそこそこ離れた場所にある飲み屋に着いた雷聖と瑠奈は早速酒を頼み、再会を喜んで飲んだ。

「それでこれからの予定はどうするの?」

だんだん客が多くなっているのを見ながら酒をチビチビ飲んでいた雷聖に瑠奈が声をかける。

「んゝそうだなあゝとりあえず組を作る。虎侍にも言っているし」

「へえゝ念願の自分の組をねえゝ」

瑠奈は店員を呼び止めて酒をおかわりする。

ちよつと飲みすぎだろ。俺まだ2杯しか飲んでねえのに…見てねえ間に6個も杯が転がってやがる……

「お前も前に入るって言ってたからこれで3人だろ？あとは皐月って子がもし入るなら4人…いい感じじゃね？」

「まあそうね。で、拠点は朝陽と夕陽どっちにするの？」

東と西にある拠点は武人の間では東を朝陽、西を夕陽と呼んでいる。

「それは前から夕陽の方に決めてる。耶漸さんやせんとから組を作るなら夕陽に來いって言われてるし」

「ああ、耶漸さんいい人だしね」

瑠奈はつまみが無くなったので酒とつまみを追加で頼む。

よく飲むなあ…俺もザルになりてえ。4杯で潰れるって…

「というかまた耶漸さんの拠点、増築したらしいぞ」

「また?!3ヶ月に1回の間隔で増築してるわよね？」

「ああ、なんでも組の内では恋仲になったやつが子供産んで、耶漸さんも仕事と私事はしっかりけじめをつけて欲しいらしくてな。個別で家を作って出産祝いとして渡してるらしいからな」

「出産祝いで家って…長屋とかじゃなくて？」

「長屋は子供の居ない夫婦が独り身用だとさ」

「へえ…すごいねえ…暫く夕陽の主は揺るぎが無さそうね」

「まあここ10年朝陽も夕陽も主同士うまくやってるし周りの声も批判的なことは殆どないからなあ。朝陽の方は跡継ぎがよく出来たやつみたいだったし耶漸さんもよくしてるって言ってたし」

「前にそういうこと言ってたっけ？」

「いや、お前と別れて直ぐに歓優さんに会ってさ少し話をしたんだ」

「ふ〜ん、歓優さんって確か菅野 歓優さんかんのかんゆうよね？あの壱番隊の隊長さん。お子さん居たんじゃなかったっけ？」

「ああ、歓優さん。5歳になった子供にいい脇差を贈りたいらしくて自分から礎永鉄を掘りに行くらしい」

「随分手の込んだ物を贈るのね…」

「ああ、因みに奥さんは3人目を身籠っているらしい」

「…3人とも年子になるのね。元気よねえ」

今お前が老けて見えたとは言わないほうが俺の身のためだな…

「ところでもう飲まないの？」

ん？いつの間に飲んだんだ？

「じゃあもう一杯だけ飲むかな」

「そうこなくっちゃ！」

瑠奈はまた店員を呼び酒を2杯頼んだ。

「んゝ今頃臯月と虎君はいい感じになってるかなあゝ」

流し目で雷聖に言ってくる瑠奈。

「まああんまり心配してもな…」

「心配じゃないの？」

「心配ちゃ心配だがあいつらの事だ。俺たちがとやかく言つのもあいつらの為にならねえ」

「そう言われると…」

瑠奈が納得したような顔で頷いた。

結構酒が回って来たなゝこれ飲んだら帰るか。

雷聖がそう思っている内にも瑠奈は次の酒を頼んでいた。

「おいおい飲み過ぎるなよ…」

「それはあたしの言葉。この前張り切って飲んで潰れて負ぶわれて帰ったのは誰？」

「う…」

あのときの俺はどうかしてたんだよ…嫌な記憶を掘り返さないでくれよ……

はあ…とため息を吐く雷聖。そんな雷聖を笑いながら見る瑠奈。

その後雷聖が3杯目の酒を飲み終わる頃には瑠奈はさらに3杯の酒を飲んで計12杯もの酒を飲み干していた。

4倍…

雷聖は軽く絶句していた。

「だって、皐月はまだ飲めないからどうも遠慮しちゃって…でも久々に飲むのもスカッとしていいわね」

スカッとするために12杯も飲むとか…まあいいか

「あれ？雨降ってるんだ…」

瑠奈は雷聖が支払いをしているときに戸を開けて外の様子を伝えてきた。

「んゝ明日まで振りそうだな…」

「そうねえゝあ、傘貸してくれない？」

「すみませんこれが最後の1本になってしまいました…」

店員が申し訳なさそうに傘を1本さしだしてきた。

「ああ、大丈夫よ」

瑠奈は支払いが終わった雷聖の腕に自分の腕を組んで楽しそうにする。

「ありがとうございましたー」

「ふふふ…久しぶりに雷聖と飲んだらいつもよりお酒美味しかったなゝ」

店員の見送りを受けて瑠奈が楽しそうに言う。

「俺も美味かったな久々だと…」

「そ・こ・はあたしが居たからって言わないとゝ」

瑠奈が雷聖の腕にもたれかかってくる。

「酔ってるのか？」

「どっちだと思っ？」

これは酔ってるな久々に見た。確か前に見たのはこいつと会ったときだったかなあ。そのときに巻き込まれて俺も潰されたんだけどな…

「あ、そういえば部屋取るの忘れてた…」

「あ…」

あいつらどうしてんだ…？まさか瑠奈の言った通りに…

「まあ皐月も虎君も常識を弁えてるでしょ」

それもそうだな。俺もつくづく心配性だ…

宿の近くまで来たときに雷聖見慣れた後ろ姿を見て驚く。

「虎侍？」

振り向くと虎侍は一体いつから居たのか分からない程ずぶ濡れだった。

「もしかして最悪の展開？」

瑠奈がボソリと呟く。幸い虎侍の耳には入っていないようだ。

「とりあえず虎君お風呂に連れて行ったほうがいいと思うけど」

瑠奈が耳打ちをしてくる。よく見ると虎侍の顔色が随分悪い。

これは…詳しく聞くのは止めたほうがよさそうだな…

「虎侍さつさと温まって寝るぞ」

雷聖は瑠奈に傘を預けて虎侍の元へ向かう。

杞憂ならいいんだがな…

第十八話（後書き）

来週の更新少し遅れるかもしれませんが。出来るだけ遅れないようにしますが少し危ういです……

第十九話

瑠奈 side . . .

あゝ失敗しちゃったな

飲み屋から借りている傘を畳み、宿の店員に預かってもらう。そして雷聖と虎侍が泊まる部屋もついでに借りておく。瑠奈と皐月の部屋から3部屋ほど離れた部屋の札を渡された。そしてちょうど雷聖が浴場から出てくる。

「虎君どう？」

瑠奈は部屋の札を渡しながら聞いた。

「んゝ放心状態？」

「あちゃゝ、あたし達も少しふざけ過ぎたわね」

瑠奈は俯き、雷聖は頭をガリガリと掻く。

「そついえば皐月はどうしてるのかしら？虎君があんな感じじゃ皐月も相当参ってそつね…」

「ああ、そつちの方も気になるな」

瑠奈はじーつと雷聖を見て。

「男子禁制！」

「分かってる！」

雷聖は慌てて否定する。

「そっちの方は瑠奈に任せるから部屋に行くついでに俺と虎侍の鞆を渡してくれあいつの服も必要だし」

「まあそれなら…でも部屋の外で待っててよ！」

瑠奈はそう言ってさっさと歩き出す。雷聖はその後を追う。

「臯月？…入るよ」

「おかえりなさい…」

「う、うんただいま」

臯月の弱弱い声が瑠奈に刺さる。瑠奈はそろそろと部屋に入り、部屋に明かりは無く真っ黒だが気配で臯月が部屋の隅で居るのは分かる。

直ぐに声をかけたいけど先に雷聖に荷物渡さないと無理やり入ってきそうね。え…と確かこの辺に…

ガッ！

ゴツッ！

「痛っ…」

瑠奈は置いてある鞆に躓き結構な勢いで壁に激突する。

「瑠奈大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫…」

うつゝ心配なのは皐月だよ。また辛いことを溜め込もうとしてるし…

瑠奈は躓いた鞆を拾い渡しに行く。戸を開けると直ぐに雷聖が来て瑠奈は荷物を渡す。

「これだけよね？」

「ああ、ありがとう」

雷聖は荷物を見て答える。

「虎君疲れてるはずだから今日は何も聞かずゆつくりさせてあげなさいよ。ずっと雨に打たれてたんだから下手に湯冷めとかしたら明日風邪ひいちゃうし」

「分かってるお前の方もほどほどにしろよ」

雷聖はそう言っただけで部屋の方へ向かっていく。瑠奈はそれを見送り小さくため息をついた。

はあ、皐月に事情を聞かないと。こんな雰囲気ですごくこれから旅をしましょうなんて言えないし。でもどっちかが悪いっていう感じじゃないしむしろ、どっちも反省してるみたいに見えるし…厄介なことになったわね…とりあえず事情が分からないと何も進まないわ

ね頑張らないと。

瑠奈は心の中で気合を入れ、部屋の中に入り戸を閉める。暗い部屋に目が慣れるまで少し待つ。その間皐月の息遣いを聞く。

あら、もしかして泣いてた？

目が慣れたところで部屋にある小さな行灯に火を灯す。小さな光だが暗かった部屋を明るくさせる。皐月の方を見ると背中を壁につけて俯いて座っていた。

んゝ少し落ち着くのを待ったほうがいいわね。お茶でも飲もうかしら。

部屋に置いてある急須にお湯を入れ2人分のお茶を入れる。

「皐月、お茶よ。熱いから気をつけてね」

皐月は瑠奈からお茶を受け取りゆっくり啜る。瑠奈もそれを見てお茶に息を吹きかけながら少しずつ飲む。温かさがほんのり染み渡る。

虎君も皐月も落ち込みすぎて体調まで響かないといいんだけど。

妹と弟を見守る気分になる瑠奈だった。

「瑠奈。ごめんなさい折角、虎侍さんと2人つきりにしてくれたのに……」

全くこんな時にまで他人を優先するんだから……まあそこが皐月の良い所なだけだね。

「大丈夫よ。元はあたしが言い出したんだもの」

「でも、ごめんなさい」

あゝ失敗した。ここから聞き出すのは厳しい。

2人の間に沈黙が漂う。

「瑠奈。私初めて好きになった人が虎侍さんだと思うの」

「うん」

皐月の告白を遮らないように静かに瑠奈は聴く。

「でも私じゃ駄目みたい」

「なんで？」

「私弱いから。だから虎侍さんにも…」

「皐月。あたし達が居なかったときのことを教えてくれない？あたしが無理に虎君と2人つきりにさせたんだし、こうなった過程をちゃんと聞いておく必要があると思うし。」

ここまできたらちゃんと聴いておかないとね…

殆ど影になって見えなかった皐月の顔がようやく見える。いつもは整っていて真っ直ぐな髪の毛が少し乱れ、目はさっきまで泣いていたことがハッキリと分かるほど充血している。そんな瑠奈を見てい

ると瑠奈はつい数時間前の自分に叱咤したい気持ちに襲われる。

「実は…夕食を虎侍さんと食べ終えたところまでは自分でも上手くいったと思ってたの。でも、私が先にお店から出ていたときに私…男性の人に暗いところまで連れて行かれて……」

皐月の言葉が止まる。瑠奈は皐月の次の言葉を止めようかと迷い夜の静けさが部屋に訪れる。

「皐月、無理しなくていいよ。疲れたでしょ。お茶でも飲んで今日はゆっくり寝ればいいわ」

瑠奈は言い出せない皐月にこれ以上聴くことは憚られたので就寝を促すためにお茶を急須に入れるために立ち上がろうとする。

「待つて瑠奈。急に止めてしまつてごめんなさい」

「皐月、無理をしなくてもいいのよ？」

「私、弱くても頑張つて虎侍さんの傍で居たいから…聞いて欲しいの」

皐月の言葉を聞いて瑠奈は思わず微笑みを浮かべてしまふ。

「分かった、ちゃんと聞くわ」

顔を引き締め皐月に頷く。皐月もそれを見て小さく頷く。

「私、その男性に変なことをされそうになったときに虎侍さんが助けてくれたの。でも、そのとき虎侍さんの顔、とっても怒って見え

たの」

うんうん、虎君も男の子ね。少し見直しちゃった。

「それで？」

「えっとそれだけなんだけれど……」

……あれ？掴みかけてた答えがどっかに吹き飛ばされたみたいなんだけれど……

ていうかどこでこういう風になったのか全く分からないんだけど？えーっとお店を出て不良に皐月が襲われているところを虎君が助けたのよね？

真反対の方向に進んでるのは何で？

「え、えっと皐月？」

「どうしたの？」

別の意味で困惑している2人の視線が合う。

「宿の近くでは何にも無かった？」

「……私、宿の近くに来て虎侍さんに謝ったんだけどそのとき虎侍さんが顔を逸らして……私、振られたんだろうけどそう思いたくなくてそれでよく分からないうちに宿に入ってここで居たの」

あつれー？どこでどうなったの？虎君が皐月を振ったなら虎君がそんなに落ち込んでる訳ないし。逆なら皐月の落ち込みも違うと思うんだけど。何か蝶結びをした紐を解こうとして、間違えて固結びに

なっちゃったみたいに見えるんだけど…勘違い？
ここまできて勘違い？そりゃないよ…

「臯月、よく聞いてね。多分臯月も虎君も勘違いしてると思うの」

「え？だつて？」

「虎君の性格を考えてみるとあんまり人と顔をじっくり見合わせて喋る子に見えないでしょ？まあ謝られて顔を逸らすつてのもあんまりだと思っけど」

「え？じゃあ」

「多分お互いを想いすぎて、お互い勘違いしたんだと思うわよ」

あゝ心配しすぎた。思わず平和よね…って言いそうになったし。ここまで分かつちゃうと脱力ものだわ。

「でも、その…私、本当に振られてたら…」

臯月の目に光が差すが、また曇ってしまふ。

「大丈夫よ。何ならしばらく様子を見て今度は、間違わないように虎君に告白しなさい。誰も邪魔なんてしないわよ。きつと」

あ、不安要素言っちゃった。でも大丈夫そうね。その前の告白の部分から後ろは全然頭に入ってなさそうだし。

「そ、それじゃしばらくえっと…虎侍さんの様子を見てそれから…
…」

あらゝまた顔が真っ赤になってわね。青春よねゝ…何か今、あたしもの凄く老けた気がする…

「それじゃあまあとりあえずこの話は解決ってことで…寝ましょうか？」

「はい」

ふうつと息を吐く瑠奈。

疲れた……。

第十九話（後書き）

誤字、脱字、アドバイス、評価待ってます〜！

辛口の感想でもいいですよ〜

第二十話（前書き）

祝二十話！！

でもいつもよりちょい少なめ……

第二十話

皐月side...

昨日はいつもより遅く寝たのに気分はいつもより数段よかった。

「ふあゝ...おはよう、皐月」

皐月の隣で瑠奈は欠伸をして布団からモゾモゾと這い出てくる。

「おはよう瑠奈。ごめんなさい昨日はあんなに遅くまで...」

随分眠たそうにしている瑠奈を見ると昨日のことが響いているんだなと思ってつついっし謝ってしまう。

「いいわよ。可愛い妹の為なもの」

「妹って...ありがとう」

瑠奈は皐月に会って暫らくしてから皐月を妹だというようになり、皐月は子ども扱いをされているようでいつも頬を膨らませていたが今回は感謝の気持ちが勝ちスルリと言葉が出てくる。

そんな皐月に瑠奈は少し驚きすぐに嬉しそうに微笑みを浮かべる。

「そんな風に感謝されると照れるから」

皐月と瑠奈はお互いに見やり微笑む。

それから暫らく身だしなみを整えて時間を潰す。

「そういえば虎君は大丈夫かしら…?」

「え?」

突然瑠奈が呟いた言葉に皐月は反応する。

「ああ、虎君ね。昨日多分皐月と別れた後ずっと外で居たみたいで、あたしと雷聖が帰って来たとき雨のせいですぶ濡れになってたのよ」

「えっ!」

皐月は瑠奈の言葉で浮ついていた心が沈んでいく。

そんな…虎侍さんはずっと外で居たのに私はひとり、屋根のある場所
所で居たなんて…

「あ、あの虎侍さんは大丈夫なんですか?」

「んゝ多分大丈夫よ。すぐにお風呂に入らせたし。それに風邪をひいてもこの町には医者も居るし。うん、大丈夫大丈夫」

風邪をひいても大丈夫という瑠奈に、心配そうに目を少し潤ませる
皐月の視線がぶつかる。

「う…うんゝ。じゃあ、今日はどうか雷聖に聞いてくるから虎君の様子も一緒に見てくるわ」

「うん！」

瑠奈の提案に頷く皐月。

「あ…でも、虎侍さん怒ってない…かな？」

昨日あんな風に勝手に帰ったのに今日は心配だから様子を見てるって…なんか感じ悪いな。

「大丈夫よ。それに皐月が虎君のことが大好きだよって一言言っただけじゃ風邪なんて吹っ飛ばして走り出しそうだし」

そんなに言われると恥ずかしい。

皐月はおもわず顔を赤面させる。瑠奈はそんな皐月を見て笑う。

「でもな。元は虎君の紛らわしい行動のせいでこうなったんだよね」

瑠奈の不敵な笑みが皐月の顔を捉える。

あ、また何か企んでる。

「虎君には何も言わないでおこうと。自業自得なわけだし」

「瑠奈、あんまり意地悪しちゃ駄目だよ？」

「ふっふっふ。皐月、他人事に聞こえるけど皐月はもの凄く関わってるよ」

「え？」

「だって虎君今のところ皐月と喧嘩別れした状態よ。ここから虎君に皐月は告白までいかないとないといけないのよ」

瑠奈はそれはもうすごく楽しそうに言う。

「え、そんな！」

そそそそそ、そんな！ととと、虎侍さんに告白っっ！

皐月の脳内は混乱している。

「それじゃ、あたし雷聖のところに行ってくるね」

「そんな、私が虎侍さんに……ここ、告白……告白……」

瑠奈の言葉は皐月に届いていないようだ。

………それで虎侍さんが帰ってきて私がご飯にする？それともお風呂？それとも……私？

——キャーっ！恥ずかしい！！！！

「はっ！瑠奈は？」

あれ？いつの間に居なくなっただの？

戸の方へ行くと瑠奈の履物が無かったので雷聖のところへ行っただかと皐月と思う。

「ふう〜とりあえず虎待さんと仲直りをする方法を考えたほうがいいかな」

皐月はお茶を入れてまた深く考えを巡らす。

「皐月〜ただいま〜ってあれ？寝てるの？も〜」

ん〜…瑠奈帰ってきたんだ。私いつの間に寝ちゃったんだろ。

「お帰り瑠奈。ふあ〜」

ついつい欠伸が出てしまう皐月。

「じゃ、朝ご飯行こうか。虎君も一緒よ」

「ムゲっ！」

欠伸で開けていた口が急いで閉まる。

「え？どういうこと？」

「ん〜さすがに後押し無しじゃ薄情だしね。雷聖と相談して虎君と仲が直るまでは色々としてあげようってね」

「ありがとう瑠奈。嬉しい」

皐月は喜び満面の笑顔を零す。

「でも、告白するとき、あたしたちは手を一切出さないからね。これは奥手な皐月への試練だからね」

「し、試練…分かった頑張って虎侍さんに告白する！」

皐月の宣言を聞いて瑠奈はうんうんと頷く。

「じゃ、ご飯を食べにいきましょう」

「はい！」

後ろから来る瑠奈が呟いた言葉に皐月は胸がいつぱいになる。

「艱難、汝を玉にすつてね…頑張rinaさいよ皐月」

うん、これからも色々あると思うけど頑張っていくよ！！

第二十話（後書き）

巻きで作ったよ：黄色い我が脳みそがフル回転。

話が進まない！悶々としてる方 m（・|・） m スマヌそろそろ話が進む予定ですので！

（予定は未定とか脳裏で浮かんだのは何故に？（|・|）・・・
．．．アレ？．．．）

第二十一話（前書き）

ようやく話が少しずつ動きだします！

あと少し専門用語が出てますがそんなもんなんだだけ思っ
ておいてください。

第二十一話

虎侍 side . . .

あの何とも気まずい日から4日経ちました。

俺が早乙女さんに振られた日から4日…雷聖と深那月さんと早乙女さんとで朝昼晩と食事にいつも一緒に行っている。雷聖と深那月さんはよく俺と早乙女さんの方をチラチラと見て皐月さんはソワソワしてる。

アハハハハ、そりゃあ気まずいよねー。強引に女の子を引っ張ってねえー。飯も一緒に行かないと怖いよねー。

グスッ……目からしょっぱい汗が出てきそうだよ……顔は無表情だけどね。

「虎侍。今日だったよな刀が出来る日は？」

雷聖の問いかけにコクリと頷く虎侍。

「じゃあご飯食べたら鍛冶屋に行くか」

「虎君の新しい刀かぁー楽しみねえーねえ皐月？」

「う、うん…」

振った俺の刀の評価とかいいから深那月さん止めてあげてー早乙女さんすっごい答え難そうだから。そして俺の心に鋭い棘が刺さってくるから…

虎侍は心の中でため息をする。

4日前だったらどんな刀が出来たのか楽しみだったろうな、今じゃドーデモイイヨ…

心の中で枯れたような笑いを零す虎侍。

「よし！鍛冶屋に行くか！」

「楽しみね」

瑠奈は自然と雷聖の腕に自分の腕を絡めて寄り添い歩き出す。

目に毒だー！何アレ？当て付けですか？！！

「おお！お前さんか待ったぞ」

じいさんがムフフと笑いながら店の奥に入っていく。

「坊主、よく来たな、グフフ…」

じいさんが入っていった方からおっさんが変な笑いを零しながら出てきた。虎侍の後ろで瑠奈が雷聖に「この店大丈夫なの？」と不安そうに言っている。

俺も聞きたい…

おっさんは刀袋に入った刀を一本渡してきた。

「ほら、これ前に坊主が使ってた刀だ。一応くっ付けたが魔物相手には使うなよ」

頷き刀袋を受け取る。慣れ親しんだ重さが落ち着かなかった心を静める。

そういえば元の世界から持ってきてちゃんと手元にあるのってこれだけだな。道着の上着は着物じゃないから先生に預かってもらってるし、袴の方はボロボロになって捨てたし…この刀だけは出来るだけ手元に置いとくようにしよう。唯一の元の世界への手がかりだし。

「後ろの方はお連れさんか？」

「ああ、こいつの保護者だ」

え？！仲間とか相棒とかじゃなくて保護者の位置だったの！？…ちよっとシヨック……

虎侍は心に20のダメージを受けた。

「それじゃあ、試斬も見るか？」

「へえ、試斬までするのか」

雷聖は感心するように頷く。

「当たり前だ。うちの打った物が合わないから死んだ、なんて言われた日には店の看板を降ろさねえといけねえからな。その辺に関しては徹底的にやらせてもらってるよ」

おっさんは腕を組み、胸を反らして自慢をするように言う。

「坊主、新しい刀は裏の試斬をする場所で渡すからついて来な」

おっさんは横の方にあつた扉を開けて外に出て行く、虎侍達もおっさんの後に付いていく。

「ここだ。ここにある試斬棒を使ってくれ」

おっさんが案内をしてくれた場所には20近い試斬棒が並んでいた。

「随分大量にあるな」

「ああ、親父が弟子に修行の一環で作らせてるんだ。全部斬っても明日にはまた同じ数ぐらい出来てるぞ」

雷聖はおっさんの言葉にまた感心している。そして工房の方からじいさんが出てきた。

「カッカッカ！身の丈に合わん武器を持っていても怪我をするだけだからのう。お前さんも納得するまで斬るがええ」

一振りの刀を差し出しながらいさんは言う。

頷き虎侍は刀を受け取る。漆が丁寧に塗られた鞘はツルツルしており触っているだけで気持ちがよくなる。

虎侍はじいさんに刀袋に入った刀を預けた。

そして若草色の糸で出来ている柄に手をかける。まだ馴染んでない柄系が虎侍を新鮮な気持ちにさせる。目抜には龍、鰐には虎がまる

で絵のように並んでいる。

虎侍は鯉口を切り、ゆっくり刀の刀身を露にする。刀身にある波紋は一見規則無く乱れているように見えるが、乱れの一つ一つに意味があるような美しさで並んでいる。

「軽い…」

虎侍はポツリと呟く。

「カツカツカ！お前さんが使っていた物に比べれば歴然だろう」

これ本当に真剣か？木刀と同じぐらいの重さしかないんだけど。まさか竹光？

じいさんとおっさんが聞いたら卒倒しそうなことを思う虎侍。

「虎侍、試斬してみろよ」

雷聖が後ろで急かす。

虎侍は一度刃を戻し、刀を腰に差し調節する。そして試斬棒の前行く。

一度大きく息を吐き集中力を引き上げる。腰を僅かに落とし、刀に手をかけ角度を調節しながら鯉口を切る。柄に手をかける。

息を小さく吸う。そして

——戦源流剣術・壱

抜き放つ。

刀は虎侍の意思に従い試斬棒の真ん中を斬る。

一瞬のことだが、虎侍には永遠に近い時間。横一文字に振るった刀が試斬棒にあたり手ごたえがする、そのすぐ後に堰を切った用に試斬棒に巻かれている藁が一本一本斬れていく。

それは刀の美しさと隠れるように共存する強さが最大限に現れる一瞬。

トサッ

試斬棒の切れた上部分が落ちる音がやけに大きく聞こえる。

キンッ

刀の直すときの鯉口が鳴り一振りの刀が織り成す舞台が終わる。

「お見事。刀の方もお前さんを認めているみたいだの」

じいさんは満足げにカッカカと笑う。

ちよっ！何だこの切れ味ハンパねえ！試斬棒の切り口とかもの凄い滑らかなんですけど！！気持ちいいー！

虎侍は刀の切れ味にテンションがこの上なく上がっている。

「虎君って実はもの凄い子？何この切り口、今まで見たこと無いわよ」

「虎侍さん凄い」

「虎侍！もう一回やってくれよ」

コクコクと頷き横にある試斬棒の方へ向かう虎侍は賛美の声は届いておらず。皇月の声も殆ど雷聖の声にかき消されていた。

4、5本ほど斬って満足した虎侍御一行は店の中で出されたお茶を飲んでいた。

「坊主満足したか？」

虎侍は頷く。それを見ておっさんも満足している。

「それじゃあ、代金の方だが1500銭でいいか？」

おっさんの言葉に頷き懷から財布を出し、100銭を15枚おっさんに渡す。

「なっ！！あんな業物が1500銭で？！！」

のほほんとお茶を飲んでいた雷聖が驚き声を出す。

「ああ、今回の刀は親父が弟子に己惚れる事の無いように打った物だから材料費以外はとれねえよ」

「材料費で1500銭！？何を使ったのよ？」

今度は瑠奈が騒ぎ出す。

「2級礎永鉄だ」

ブッ！

雷聖達が一斉に噴き出す。虎侍は頭に疑問符を浮かべながら雷聖達の行動に少し引いた。

「なななな、何でそんないいものを！！」

「ま、まあ2級の礎永鉄を使った武器を作りここまで来る奴なんて居ねえから弟子に見せるのに使う予定だったんだ。そのときに坊主が来て飾りにするぐらいだったら坊主に渡して有効に使ってもらおうって話になったんだよ」

「虎侍、お前って意外と強運なんだな」

雷聖は虎侍を見て言う。虎侍は何のことが分からなかったがとりあえず頷いた。

「ねえ、次は薙刀を2級の礎永鉄で作る気はない」

瑠奈はおっさんに色仕掛けをしていた。皐月は持っていたお茶を零したらしくおっさんに布巾をもらって拭いていた。

何か思いがけずに良い物をいい値段で買ったみたいだな…ラッキー？

虎侍が2級礎永鉄がどこまで良い物かを雷聖から教えてもらえるのはもう少し後のこと。

第二十一話（後書き）

ユニーク数が1500を突破！アクセス数は今夜で10万いくと思
います！！

日々のご愛読感謝します！！！> (_ _) <

愚痴しか書いてないような活動報告もよろしく～！

第二十二話（前書き）

すみませんインターネットが一時繋がらない状態になりました。

第二十二話

雷聖 side . . .

ドツドツド! ! !

「ぎゅおおおおお! ! !」

背中に硬い鱗をもった牛のような体に鱗暴牛が人の腕ほどの長さがある角を振り回し、周りの木々をなぎ倒し雷聖達に向かっている。

「一気に決めるぞ」

雷聖は言いながら走り出す。横に居た虎侍と瑠奈も雷聖の後に続く。

ヒュンツ! ヒュンツ!

雷聖達の後方から皐月の的確な矢が走り、鱗暴牛の両目に深く突き刺さる。鱗暴牛は視界が無くなり激痛のためかその場で先ほどよりもひどく暴れだす。

雷聖の右隣に居た虎侍は鱗暴牛の目に矢が刺さった瞬間、霞むような速さで駆けて行き――

ザンツ!

鱗暴牛の右の角を根元から絶った。

鱗暴牛は左右対称にあった角の片方が無くなり頭のつりあいが保てず左の方へフラフラと進み瑠奈の間合いに入る。そして残ったほうの角に薙刀を絡められドツという音と共に鱗暴牛の体は倒される。

雷聖は鱗暴牛の急所である腹に勢いを乗せた拳を叩きつける。骨が砕ける感触の後に内臓の潰れる感触が続く。鱗暴牛の口から体液が吹き出す。

鱗暴牛はもがくことなく痙攣し、息絶える。

「よし、終わったな」

雷聖はふうと息を吐く。横に來た瑠奈も依頼が無事に終わり安心した顔になる。後ろの方で弓を使い鱗暴牛に矢を射っていた皐月も近寄ってくる。

「皐月、今回も的確ね」

瑠奈が皐月を褒める。そしてそろそろと虎侍の方を盗み見る。

あからさま過ぎるだろ。

5日前にヨナジャクで瑠奈は雷聖に皐月が虎侍のことを想っているということを話した。少々の行き違いで今は喧嘩別れの状態になっており、急を強いて2人をくっつけようとした瑠奈と雷聖にも少なからず責任があるのでせめて2人が仲直りするまでを手助けしようということになった。

そのあとの皐月の頑張りで虎侍とどうなるかというところは皐月と虎侍に任せようということになっている。

ちなみに虎侍には皐月が虎侍のことを好きだということを秘密にしている。これは虎侍の無口、無表情を直させるためだと瑠奈が言い張ったからだ。

ということでは今は両想いだということを両方にしっかりと理解させ、お互いの印象を良くするために瑠奈と雷聖が動き、皐月は瑠奈の行動を理解して行動を起こす度に虎侍の反応を何度も見ようとする状

態だ。

瑠奈もそんなにジロジロ見るな！虎侍にばれるだろ。

雷聖はため息をひっそりと吐く。

虎侍は5日前から言葉を殆ど発していない。何を聞いても頷いたり二、三言葉を発するだけだ。

今も雷聖達に背を向ける形で新しい刀の点検を軽くしているようで恐らく先ほどの瑠奈の言葉も聞いていないだろう。

まるで俺たちを拒絶してるみたいだな…

雷聖は頭をボリボリ掻く。

「それじゃあ、町にさっさと帰って休むか」

先ほどの鱗暴牛の討伐依頼は雷聖たちが立ち寄った町で困っていると聞き、役所で依頼してもらいすぐに雷聖たちが受けたものだ。

町の人たちには1日以内に片付けると言い少々依頼の報酬を上げてもらうなどをしてもらっているので日が暮れるまでに町の役所に討伐したと報告に行かなければならない。

町の方も気にしてる人が多いだろうしゆっくり休むのは宿でするしかなさそうだな。

「いや、我々の財産である森を守っていただいて誠にありがとうございます。町の衆の代表として感謝を致します」

町に戻り役所で討伐の報告をして、近くの宿でゆっくりしようと役

所を出たときに町の代表が現れ近場の宿に連れて行かれ宛がわれた部屋で10分近く感謝の気持ちを言われ続け雷聖たちは疲れているところに止めを刺されている。

代表にはそんなつもりはないのだろう何度も頭を下げている。

早く休ませてくれ……

「俺たちも報酬を上げてもらっているからちゃんと討伐するのが仕事だから…」

「いえいえとんでもない。あの森がなければ少なくとも今年の収穫は半減しているところでした。感謝しきれません」

雷聖の言葉を遮りまた感謝しだす代表。雷聖は諦めて代表が飽きるまで待つことにした。ちなみに虎侍、瑠奈、皐月は代表を雷聖に任せ後ろの方でお茶を飲んでまったりしている。

雷聖は代表がまた頭を下げている内に後ろの方を恨みがましく見るすぐに逸らされる視線に少し裏切られた気持ちになる雷聖。

「失礼します。町長、旅の方々は疲れているでしょうからそろそろお暇されたほうがよろしいと思いますよ」

女将と思われる女性が雷聖に助け船を出す。雷聖には天の神のように思われた。

「そうだな、では失礼させていただきます。この町に居る間はこの宿をお使いください。宿代は要りませんよ。この町をお救いください。方々が心地よく過ごしていただけるように言っておりますので」

代表改め町長はそれではと言い部屋を出て行く。

「すみませんあの方の話はいつも長くなるので」

女性はすまなさそうに言う。

「いや、助けてもらってよかったです」

雷聖はどこかホツとした気持ちで言う。女性も雷聖の返事を聞き嬉しそうに微笑む。

「では当宿自慢の温泉と料理を楽しんでくださいませ」

女性はそう言って出て行った。

「瑠奈、助けてくれてもいいじゃねえか」

雷聖は瑠奈が入れたお茶を飲み瑠奈に抗議する。

「だってあんなに感謝の気持ちを込められてるのにもう良いですって言うのも悪いし」

瑠奈は自分は悪くないと暗に言う。雷聖はあゝと疲れが詰まった息を吐く。

「虎侍、風呂行くか？」

雷聖は荷物をゴソゴソしながら虎侍に聞く。虎侍は頷き荷物のところに行き服を出す。雷聖も服を引っ張りだし入浴に行く。部屋を出るときに瑠奈が雷聖の荷物をひっくり返し整頓しながらまた入れているのが見えた。

明日はこの町で休んで餡蜜でも食わしてやるか。

雷聖は明日の予定を立てて温泉に行く。

ザバ~~~~

盛大にお湯を浴槽から流しながら風呂に浸かる雷聖と虎侍。広々とした浴槽に2人だけなので開放感がある。

「はあ〜いい湯だ〜」

雷聖はお湯で顔をゴシゴシと擦りまるで40過ぎのおっさんのようになっている。

「虎侍いい湯だな」

雷聖はずっと黙っている虎侍が心配になり声をかける。虎侍は頷くだけだ。

あゝ皐月のことを気にしてるのか？瑠奈にああ言われたけど虎侍にも皐月がどう想っているか言ったほうが良いような…でも瑠奈に無口を直すためだと言われるとな〜

虎侍の胸の内を聞きたいがあまりズケズケと人の心に深入りするの
は趣味じゃないのでどうしようか真剣に悩む雷聖。

もしかして記憶喪失で悩んでる？もしくは記憶が戻りそう？

うーんと思考に嵌る雷聖。10分後のぼせてフラフラになりながら部屋に戻る雷聖だった。

「まあ、話してくれるようになるまで待つか」

眩かれた優しい言葉を聞くものは誰も居ない。

第二十二話（後書き）

今回は4人が魔物と戦うシーンを書こうとして最初の500字ほどで終わり皐月と別れた（？）虎侍の様子を雷聖の視線で書きました。でも書いたあと後悔…殆ど要らない話だと気付きそれでも載せます。次は少し身のある話にします。

あと2週間ほどお休みもらいます。楽しみにしていただいている方には申し訳ないです。それでは…

アンケート！！橘 虎侍編

この度はこのような拙い小説のために来ていただきましてありがとうございます。

諸事情が重なり更新が停滞しておりました。

そのため登場人物の設定などもよく分からなくなり、もう一度書き直したほうがいいだろうと一念発起しました。

前置きはこのくらいにさせていただきます！

ではアンケートスタート！（アンケートの答えは感想やコメントに番号などでぶち込んでやってくださいヨロシク）（――＊）（X）
＊――（――ヨロシク）

その巻《主人公：橘 虎侍について》

1、ぶつちやけ暗すぎ

2、もうちょい言葉がほしい

3、表情もつとだしたら？

4、もっと根暗に！！

5、心の中はっちゃけすぎじゃね？

6、いやいやもつと心の中をぶちまけてしまえ！

7、武器が刀ってビミョー

8、刀だけじゃなくてもつと色々な武器使え！

9、ツンデレ要素くれ

10、
ハイム作れ

11、語尾に特徴的な言葉を（某主人公の「だってばよ」的な何か）

12、三角関係とかもつとドロドロしたものを

13、もつと元の世界の未練をタラタラに！

14、むしろさっぱり未練とか切捨てて〜

15、方言とかいれてみたら？

16、チートキャラでいつちゃえば？

17、特に設定は変えなくて、作者の気ままに書けば？

上記以外で何かここを改善しろという部分を書いてください

(励ましか頂けたら嬉しいです♡)(´、)(♡ワイ)(♪)

次は 志真 雷聖ですよ

アンケート！志真 雷聖編

その式《相棒？：志真 雷聖について》

1、もつと精神年齢を上げろー！

2、主人公無口なんだからもつとうるさいキャラでも…

3、ちょいつるさ過ぎー

4、心配性度を上げてみたら？（笑）

5、強面キャラとかってどうよ？

6、何かの隠れオタクの設定ほしいかも

7、武器が自分の拳と足ってビミョー

8、もつと色々な武器使え！

9、ツンデレ要素くれ

10、ハーレム作れ

11、語尾に特徴的な言葉を（某主人公の「だってばよ」的な何か）

12、はっ…腹黒だと！？

13、口癖入れろ！

14、アホキャラばいのがいい！

15、方言とかいれてみたら？

16、特に設定は変えなくて、作者の気ままに書けば？

上記以外で何かここを改善しろという部分を書いてください

（励ましか頂けたら嬉しいですっ）、（っワイ）

次は 早乙女 皐月になりますっ

アンケート！！早乙女 皐月編

その参《早乙女 皐月について》

1、色気をくれ！

2、ロリでよくね？

3、メガネキャラ萌え！！！！

4、マニアックに委員長キャラ

5、ワルでもいいよね！

6、女王様キャラ……ハアハア…

7、武器が弓ってビミョー

8、弓だけじゃなくてもっと色々な武器使え！

9、ツンデレ要素くれ

10、逆ハーレム作れ

11、語尾に特徴的な言葉を（某主人公の「だってばよ」的な何か）

12、三角関係とかもつとドロドロしたものを

13、方言とかいれてみたら？

14、もつと積極的なキャラに！

15、まだほとんど登場してねーのに分かるか！

16、特に設定は変えなくて、作者の気ままに書けば？

上記以外で何かここを改善しろという部分を書いてください

（励ましか頂けたら嬉しいですっ）、（っワイ）

次は 深那月 瑠奈 になりますっ

アンケート！～深那月 瑠奈編

その四《深那月 瑠奈について》

- 1、色気をくれ！
- 2、ロリでよくね？
- 3、姉御的な…
- 4、ヒロインと百合的な…
- 5、雷聖ともっとイチャイチャ
- 6、女王様キャラ……ハアハア…
- 7、武器が薙刀ってビミョー
- 8、薙刀だけじゃなくてもっと色々な武器使え！
- 9、ツンドラ……ミス、ツンデレ要素くれ
- 10、逆ハーレム作れ
- 11、語尾に特徴的な言葉を（某主人公の「だってばよ」的な何か）
- 12、三角関係とかもっとドロドロしたものを
- 13、方言とかいれてみたら？

14、アホキャラ？

15、まだほとんど登場してねーのに分かるか！

16、特に設定は変えなくて、作者の気ままに書けば？

上記以外で何かここを改善しろという部分を書いてください

(励ましか頂けたら嬉しいですっ)´、(っワイ)

最後に作者に〜になります。なじってやってください

アンケート〜!!作者へ〜

その五《作者に》

- 1、なにこんなに待たせてんだよ!
- 2、復帰オメ…(黒笑)
- 3、主人公とかの設定今のままでよくね?アンケートめんどいし
- 4、戦闘描写もつとくれ!
- 5、主人公とヒロインさつさとくっ付けろ
- 6、中二病になれば?
- 7、能力描写がもつと見たい
- 8、世界観をもうちょい書けよ!
- 9、脇役キャラの出番を!(どっかの村長とか)
- 10、文章をもつと長く
- 11、むしろ短く
- 12、アンケートなんかしてねーで自分で考えろ!
- 13、もっとフランクな小説に…

もう疲れたよ燐（↑我が家の愛犬。雑種だよ）……

って訳で上記以外で何かあればドンドン書いてください。
アドバイスや励ましなんかも書いてくれると嬉しいです。

最後に〜ここまでお付き合いくださってありがとうございます。
アンケートの内容を全て使いこなせるか分かりませんが全力で書か
せていただきます。

それではこのあたりでお暇させていただきます〜（m T o T）/
サラバジャー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3635k/>

虎の生き様っ！！

2011年3月12日01時59分発行